

「京都大学文学部以文会」 岡山支部五十六年の記録



**平成 28 年 11 月 20 日
(2016)**

昭和 30 年 [1955]

『京大以文會會報 第一号』

京大以文會役員氏名

評議員 岡山 内藤 雋輔(大 10・支那史)

内藤雋輔(大 10・支那史)、内田律爾(大 4・教育学)、能仁事教・日法(昭 3・印哲)、木田貞教(昭 4・国文学)、江 寅(昭 7・言語学)

支部長 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 32 年 [1957]

『京大以文會會報 第二号』(文學部五十周年記念特集)

京大以文會役員氏名

評議員 岡山 内藤雋輔(大 10・支那史)

支部長 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 33 年 [1958]

評議員

岡山支部総会 10 月 18 日

昭和 34 年 [1959]

評議員

昭和 35 年 [1960]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 36 年 [1961]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 37 年 [1962]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 38 年 [1963]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 39 年 [1964]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 40 年 [1965]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 41 年 [1966]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 42 年 [1967]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 43 年 [1968]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 44 年 [1969]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 45 年 [1970]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 46 年 [1971]

評議員 藤井 駿(昭 5・国史)

昭和 47 年 [1972]

以文会について、いろいろ御ほねおりいただき忝く存じます。当支部もこの数年、いろいろの都合で、同窓会も開きませず、会員の連絡もいっこうついておりません。汗顔の至です。

ただ、岡山県在住の京大出身老の会合が去る 43 年に初めて開かれ、「岡山京大会」が結成され、本春には「岡山京大会名簿」もできました。それに依りますと、文学部

卒業生は合 69 名が県内に居られ各方面で活動されています。そこで、近い将来、岡山の以文会支部会員の親睦会を開いて団結融和をはかりたいと考えています、末文ながら「以文会」の発展を祈ります。

[藤井 駿記]

昭和 56 年 [1981]

岡山支部は久しく総会を開いていなかったが、本吉理事長の御要請を受けて態勢を整えることとし、まず名簿自体の作成作業から着手した。昭和 52 年度岡山京大会名簿以後、会員の移動、住所、勤務先の移動が相当数あり、少々手間取ったものの、やっと昭和 56 年現在の名簿ができ上り、総会案内状発送にこぎつけた。

6 月 27 日午後 5 時、岡山市内のまきび会館に会員 84 名中の 20 名が参集、京都よりお招ぎした文学部長水津一朗教授を囲んで総会を開いた。藤井 駿支部長あいざつに続いて水津教授から京大の近況御報告があり、次いで新支部長に大熊立治(新しく岡山京大会長にも選出されている)、幹事に由比濱省吾、三谷恵一、木下鉄矢、横山茂雄の各氏を選出した。記念写真撮影後懇親会に移り、大正からごく最近に至るまでの各時代の卒業生がこもごも、学生時代の思い出や近況の報告を述べ、また、やむを得ず欠席した会員から寄せられた近況も披露され、和気あいあいの中に話題がはずんだ。話は尽きなかったが、ほぼ 2 年ごとに総会を開く旨の諒解のもとに閉会した。

◇ ◇ ◇

当日の出席支部会員は次のとおりである(敬称略)。

内藤雋輔(大 10・東洋史)、藤井駿(昭 5・国史)、大熊立治(昭 5・国史)、湯浅幸孫(昭 20・中哲)、服部恒雄(昭 22・西洋史)、小橋 新(昭 23・西洋史)、堀野豊明(昭 24・英文)、小川 洋(昭 27・哲学)、由比濱省吾(昭 27・地理)、土岐邦夫(昭 28・哲学)、大羽 蓁(昭 29・心理)、植田敬(昭 29・伊文)、福井栄一郎(昭 29・美学美術史)、三谷恵一(昭 36・心理)、金光義弘(昭 40・心理)、多屋頼典(昭 42・心理)、木下鉄矢(昭 49・中哲)、河合保雄(昭 50・地理)、山本和良(昭 52・独文)、横山茂雄(昭 53・英文)。

末尾ながら、わざわざ御出席下さった水津文学部長に厚く御礼申し上げる。

[由比濱省吾記]

昭和 57 年 [1982]

参加費低額の文化サロンの例会を企画し、その第一回として 6 月 19 日の土曜午後に岡山美術館で「漢代 — 唐代の中国古陶磁」を観賞した。旧池田家対面所の敷地にあるモダンな美術館のサロンで、館長大熊立治氏(以文会長)から、池田家対面所の由来、岡山美術館所蔵品の概略と特色、今回の展示の見どころなど懇切な説明を受け、静かな館内でそれぞれの展示品の説明があり、また質問もし、ゆっくりと観賞した。そのあと再びサロンでくつろぎ、抹茶を喫しつつ歓談し、庭で記念撮影した。参加者からは好評をいただいた。

当日の出席者は次のとおり(敬称略)。岡本春一(昭 4・心理)、大熊立治(昭 5・国史)、大坪併治(昭 10・国文)、南条正明(昭 14・心理)、服部恒雄(昭 22・西洋史)、小橋新(昭 23・西洋史)、由比濱省吾(昭 27・地理)、

山口素光(昭 30・社会)、山田茂昭(昭 33・独文)、森定斎(昭 34・宗教)、三谷恵一(昭 36・心理)、杉山啓子(昭 46・独文)、木下鉄矢(昭 49・中哲)、山本和良(昭 52・独文)。

なおちょうど来岡中の津田貴雄(昭 35・英文)、高阪松太郎(昭 35・宗教)も参加された。 [由比濱省吾記]

昭和 58 年 [1983]

昭和 58 年 7 月 2 日、2 年ぶりの総会を岡山市内のまきび会館で開催した。岡山県関係の支部会員は現在 93 名であるが、うち 18 名が出席、また以文会本部からは本吉良治教授(心理学)の御出席をいただいた。支部の出席会員は次のとおりである(敬称略)。木畑貞清(昭 14・国文)、大熊立治(昭 5・国史)、南条正明(昭 14・心理)、石田寛(昭 17・地理)、湯浅孝孫(昭 20・中哲)、小橋新(昭 23・西洋史)、由比濱省吾(昭 27・地理)、土岐邦夫(昭 28・哲学)、大羽蓁(昭 29・心理)、福井栄一郎(昭 29・美学美術史)、三谷恵一(昭 36・心理)、多屋頼典(昭 42・心理)、杉山啓子(昭 46・独文)、木下鉄矢(昭 49・中哲)、河合保生(昭 50・地理)、横山茂雄(昭 54・英文)、鷲見勝由(昭 55・宗教)。

大熊支部長の挨拶に続いて、幹事から前回総会以後における例会、会員動静などの経過報告、会計報告を行い、支部会員名簿を配布した。支部役員は全員が再選され、引き続き次のメンバーで担当することとなった。

支部長 大熊立治(岡山美術館長)。幹事由比濱省吾(岡大・教養)、三谷恵一(岡大・文)、木下鉄矢(岡大・文)、横山茂雄(岡大・教養)。

◇ ◇ ◇

次いで懇親会に移り、まず本吉教授から京大文学部の近況についてお話があり、「84 歳の青年」木畑氏の発声で乾杯してから、酒肴を楽しみつつ、出席者全員が近況報告などを含めて自己紹介した。卒業年次が 50 年余にわたるため、各時代を反映した思い出も語られて各世代の特徴がよく出ていた。その間にスナップ写真・記念写真の撮影があり、コーヒーで一服してから由比濱幹事によるニュージーランドのスライド映写があり、南の国の自然・農村・都市の風物を観賞した。次回総会にはもっと若い層が多く出席するようはかること、また例会も開催することなどが話し合われ、くつろいだ一タを遇した。遠路おいで下さった本吉教授には厚く御礼を申し上げる。

[由比濱省吾記]

昭和 59 年 [1984]

○会員動静

岡山大学名誉教授安藤孝行氏(昭 11・哲学)は 5 月 26 日に逝去されました。

直木孝次郎氏(昭 18・国史)は今春岡山大学文学部を定年退官されました。現在は相愛大学に御勤務です。

石岡寛氏(昭 17・地理)は長年にわたる岡山県や外国の研究の功に対し、昭和 58 年度岡山県文化賞をお受けになりました。

◇ ◇ ◇

○例会

岡山市天神町の岡山市立オリエント美術館で「シルクロードと正倉院文化」特別展が開催されたのを機に、7 月 28 日午後これを見学する例会を開催しました。出席者は大熊立治支部長(昭 5・国史)、南条正明(昭

14・心理)、石田寛(昭 17・地理)、由比濱省吾(昭 27・地理)、藤原廣之(昭 28・哲学)、三谷恵一(昭 36・心理)、木下鉄矢(昭 49・中哲)、山本和良(昭 52・独文)の 8 名で、オリエント美術館の御好意で招待券をいただき、山本遣太郎館長の御案内によって展示品の見どころを懇切に説明していただき、約 2 時間の清遊をしました。見学終了後、館内の喫茶室でしばし歓談し、記念写真を撮影して散会しました。〔由比濱省吾記〕

昭和 60 年 [1985]

岡山支部では申合せにより隔年に総会を開くことにしている。今年はちょうどその年に当るが、その当日、6 月 25 日は猛烈な豪雨に見舞われた。おかげでその日になって、道路の浸永や勤務先の非常待機のため出席不能になった会員が何人かあって、結局 15 名で開会した。

わが支部は総会のほかに幹事諸兄のご尽力によって例会なるものをもち、美術館、博物館、展覧会などの解説付見学をおこない、これはなかなか好評であるが、これについては前号に報告があったはずである。尚、2 年間には会員の逝去や転出、転入もあったが、それについても報告された。そして会務報告の終りにまことにささやかな会計報告があり、ついで役員改選がおこなわれたが、例により無風のうちに総員留任ということになった。支部長・大熊立治(昭 5・国史)幹事・由比濱省吾(昭 27・地理) 三谷恵一(昭 36・心理) 木下鉄夫(昭 49・中哲) 横山茂雄(昭 53・英文)である。

そのあと、総会をさらに意義づけるため会員によるスピーチを計画した第 1 回とし

て、会の最長老の一人、内藤雋輔氏(大 10・東洋史、岡山大学名誉教授・中国短大元学長)に小講演をしてもらったが、90 歳という年令を思わせぬ明晰な論述には一同感銘をうけた。

「日本歴史への私の謎」

岡山大学名誉教授・中国短大元学長

内藤 雋輔 (大 10・東洋史)

その内容を詳細にすることは避けるが、「日本歴史への私の謎」という題で、「続日本紀」中の記事、天平九年「改大倭国為大養徳国」に始まって 10 年、天平 19 年「改大養徳国依旧為大倭国」にいたるまでに大養徳国の名が出る記事 15 回であることについての疑問と考究を述べ、これと関連して親鸞の言葉に「大日本」の語のあることへの関心、更に日本国号への言及もあって、疑問を呈すとしながらも聞く者に多くの考えるべきものを与えられたのである。

そしてその快い知的興奮のあと、各自の近況報告を含んだ、なごやかな懇親の宴をもって一夕の会を終ったことを報告してこの福を与えたい。〔大熊立治記〕

昭和 61 年 [1986]

支部会員の申から岡山県の各賞受賞の榮譽を受けた方が毎年のように出ている。受賞者各氏の御功績がこのように高く評価されたことは、支部一同として喜ばしい限りである。最近 3 年間は次の通りである。

・昭和 58 年度岡山県文化賞 石田寛氏(昭 17・地理、広島大学名誉教授)＝多

年にわたる岡山県の農山漁村の調査研究により地域社会の解明に尽し、後進の育成・地理学の向上発展に貢献し、国際学術部門にも大きい業績を残した。

・**昭和 59 年度三木記念賞** 内藤雋輔兵(大五・東洋史、岡山大学・作陽短期大学・中国女子短期大学名誉教授)＝岡山大学や県内私学など 54 年にわたり高等教育の推進に多大の貢献をし、専門の東洋史では朝鮮との交渉史に大きな研究成果をあげ、両国間の学術交流の進展に大きな役割を果たした。

・**昭和 60 年度三木記念賞** 大熊立治氏(昭 5・国史、岡山美術館館長、以文会長)＝多年にわたり岡山県教育界の要職にあつて芸術文化諸団体や社会教育団体の育成に努め、昭和 37 年には県総合文化センター初代館長として今日のセンターの基礎を築き、39 年からは岡山美術館館長として地方美術館としての名声を全国に広めた。

◇ ◇ ◇

「吉備津神社の外陣・中陣・釜鳴神事と

藤井高尚の松の屋」

岡山大学名誉教授 藤井 駿(昭 5・国史)
京都府立大学教授 藤井 学(昭 34D・国史)

快晴に恵まれた 6 月 1 日、史跡に富む吉備路の中でも重要なポイントである吉備津神社で例会を開いた。岡山大学名誉教授藤井駿氏(昭 5 国史)と御令息の京都府立大学教授藤井学氏(昭 30M 国史)」の御案内で、拝殿で祓を受けた後に国宝の本殿内部に入り、外陣、中陣を廻ってつづさに拝観し、

外廊下で吉備の野を展望しつつ歴史の概略を聞き、長い廻廊を下ってお釜殿に入り、雨月物語にも出てくる伝統的な釜鳴神事の釜の鳴る模様を拝観した。次いで門前町の宮内を通して国学者藤井高尚の旧邸(現在は岡山大学吉備津研修所)に至り、茶菓を喫しつつ藤井高尚及び旧邸の由来について講話を聞き、懇談をして解散した。

案内者藤井氏は吉備津神社の神官の家系で、今回の例会に際し、特に神社本殿内部の中陣まで入る便宜を図っていただくことができた。またこの特別企画のため今回は家族の参加も歓迎したところ、夫妻で参加した会員も多く、清遊の半日であった。緑に映える初夏の吉備路は美しく、うっすらと汗ばむほどであり、境内では弓道大会があつて、出場した多くの学校の生徒たちが賑わっていた。

◇ ◇ ◇

藤井 駿氏、藤井 学氏以外の参加者は次の通り。

大坪併治(昭 10・国史)、南条正明(昭 14・心理)、同夫人、中野光行(昭 26・独文)、佐藤卓夫(昭 27・哲学)、同夫人、由比濱省吾(昭 27・地理)、同夫人、山田茂昭(昭 33・独文)、同夫人、森定斎(昭 34・宗教)、同夫人、三谷恵一(昭 36・心理、昭 38M)、同夫人、木下鉄矢(昭 49・中哲、昭 51M、昭 54D)、同夫人、同子女 2 名。

[由比濱省吾記]

昭和 62 年 [1987]

木畑貞滝氏(昭 4・国文)の逝去、若干名の転出、近年の卒業生の県内就職などがあるため名簿を改訂し、支部会員は百名を越えることとなった。

7 月 11 日に岡山市のまきび会館で総会を開いた。都合で出席できない会員が多く、人数は前回より少なかったが、なごやかな会となった。出席者は次の通りである。大熊立治(昭 5・国史・支部長)、南条正明(昭 24・心理)、中野久夫(昭 15・英文)、石田寛(昭 16・地理)、服部恒雄(昭 22・西洋史)、中野光行(昭 26・独文)、由比濱省吾(昭 27・地理)、児玉昭人(昭 28・哲学史)、大羽 葵(昭 29・心理)、福井栄一郎(昭 29・美学)、片山 智(昭 30・英文)、森定斎(昭 34・宗教)、三谷恵一(昭 36・心理)、木下鉄矢(昭 49・中哲)、河合保生(昭 50・地理)。

会務報告に続き支部役員を再選し、若い世代の参加を得るために若手から若干名幹事を補充することとなった。また例会を活発化する方向で企画をくふうすることとなった。



「現代美術と牛窓国際芸術祭」

服部物産合資会社社長 服部恒雄
(昭 22・西洋史)

引き続き服部恒雄氏の「現代美術と牛窓芸術祭」と題する講話を、スライドをまじえて聴いた。服部氏は服部物産社長というよりは、牛窓のオリーブ園の経営主といった方がわかりやすいであろう。芸術に理解と造詣が深く、牛窓が江戸時代に朝鮮通信使の寄港地という国際都市であったことに

かんがみ、そのルネッサンスをと、ギリシャのミティリニ市と姉妹都市縁組をし、以来 JAPAN 牛窓国際芸術祭、牛窓国際ビエンナーレを開催する実行委員会の主軸として活躍してこられた。今年 11 月 1 日～3 日は第四回牛窓国際芸術祭・第 2 回ビエンナーレが計画され、彫刻展、シンポジウム、音と光のフェスティバル、アートショップなど盛りだくさんのプログラムが内外の意欲的な芸術家を迎えて催され、地元の伝統芸能も披露される。地方の一小都市がユニークな文化活動によっていかに活性化されるか注目されるところであり、この牛窓国際芸術祭は服部氏のような幅広い文化人の存在があってこそ実現できたといえる。このあと参加者それぞれが近況報告をしたり、第 1 回ビエンナーレのスライドの印象を語ったりして時の移るのを忘れた。

[由比濱省吾記]

昭和 63 年 [1988]

昭和 63 年 1 月、石田寛氏(昭 17 年・地理、広島大学名誉教授、福山大学経済学部教授)は学術上の功勞によって、山陽新聞(学術功勞)賞を受賞された。長年にわたり地理学の研究に取り組み、岡山県の農山漁村など地域社会の研究をはじめ、世界に対象地域を広げるなど、わが国の地理学発展に大いに貢献されたことが受賞理由である。同氏はさきに岡山県文化賞を受賞されたので、重ねがさねの榮譽である。悲しい便りとしては、次の方々が逝去された。山下虎一(昭 2・倫理)、藤沢吟治(昭 7・東洋史)、渡部 武(昭 9・国史)である。



「平家物語絵巻展」

林原美術館長 大熊 立治(昭 5・国史)

昭和 63 年度例会として、5 月 22 日(日)に支部長大熊立治氏が館長をしておられる林原美術館で平家物語絵巻展を観賞した。これは江戸時代中期の作とされ、かつて越前松平氏が所蔵していたもので、戦後に林原一郎氏の所有となり、この美術館の所蔵するところとなった。十二巻上中下の合計三十六巻あり、文字は第一巻上が青蓮院門跡、他は公家、武家、滝本坊(昭花堂)、絵は土佐左助となっている。平家物語の絵は多いが、絵巻形式のものとしては全国唯一のもので、全部を引き延ばせば長さ一キロメートルにもなる。



美術館ロビーで大熊支部長の懇切な説明を聞いた後、絵巻を観賞した。各巻の中で代表的な場面、および瀬戸内に関係する場面が展示されており、実にリアルかつ丹念に描かれた細密画のすばらしさは筆者の息づかいが聞えるようで、その色彩の美しさにはただ感嘆するのみであった。写真はそのうちの巻第五上「都遷」であるが、カラーで見て頂けないのが残念である。そして文字は多くの筆者があり書風もそれぞれ異なるが、特に青蓮院門跡の優美な仮名に見とれたのであった。観賞後、再びロビーでくつろぎ、美術をめぐる話題に花が咲いた。生憎の雨模様で出席会員は 6 名、同伴家族を含めると 12 名であったが、むしろ雨に煙る初夏を思わせる日の清遊のひとつときであった。出席会員は次の通りである。大熊立治(昭 5・国史)、南条正明(昭 14・心理)、中野光行(昭 26・独文)、由比濱省吾(昭

27・地理)、三谷恵一(昭 36・心理)、平岡行雄(昭 50・仏文)。

[由比濱省吾記]

平成 2 年 [1990]

隔年に総会を開催するはずのところ、諸般の事情で三年目の総会となり、1990 年 6 月 30 日(土)午後 2 時に岡山市丸の内の岡山美術館で開催した。例年は夕食会を伴っていたが、今回は簡素に午後の集会とし、家族の参加も歓迎した。

現在把握している岡山県内在住の会員は 190 名であるが、生憎の雨天ということもあって、出席者は大熊立治(昭 5 国史、岡山美術館館長)、大坪併治(昭 10・国文、元岡山大学教授)、南条正明(昭 14・心理、元岡山大学教授)、服部恒雄(昭 22・西洋史、服部物産合資会社社長)、中野光行(昭 26・独文、岡山大学教養部教授)、由比濱省吾(昭 27・地理、岡山大学教養部教授)、大羽葵(昭 29・心理、岡山大学文学部教授)、山口素光(昭 31・社会、岡山大学教養部教授)、三谷恵一(昭 36・心理、岡山大学文学部教授)、木下鉄矢(昭 43・中哲、岡山大学文学部助教授)、倉森京子(昭 62・美術史、NHK 岡山放送局)の 11 名のほか、家族 5 名の計 16 名であった。

会長挨拶に続いて、幹事から会員の動静報告、会計報告を行なった。過去 3 年間に、内藤雋輔(大 10・東洋史、岡山大学名誉教授・元中国短大学長)、山下虎一(昭 2・倫理)、能仁日法(昭 3・印哲、本行寺宿老)、藤井 駿(昭 5・国史、岡山大学名誉教授)の各長老の逝去、若干名の勤務・結婚等による転出、新会員の転入、石田寛(昭 17・

地理、広島大学名誉教授・福山大学教授)
会員のアメリカ地理学会賞受賞が報告された。ついで次期役員として現役員(会長大熊立治＝昭 5・国史、幹事由比濱省吾＝昭 27・地理、三谷恵一＝昭 36・心理、木下鉄矢＝昭 43・中哲、横山茂雄＝昭 53・英文)全員の留任、他に高等学校在職者中からの幹事若干名の増員を決めた。

◇ ◇ ◇

「続 平家物語絵巻展」

林原美術館長 大熊 立治 (昭 5・国史)

美術館ロビーで抹茶を啜しつつの総会の後、大熊会長から展示中の平家物語絵巻について懇切な説明があり、越前松平家から出た日本唯一の平家物語絵巻を一同で鑑賞した。極めて保存良好な美しい書と細密な絵は、源平の時代の世界にしばし我々を没入させた。
[由比濱省吾記]

平成 4 年 [1992]

平成 4 年度総会を 6 月 27 日に岡山市下石井の「まきび会館」で午後 6 時から開催した。会合や出張が重複したためやむをえず出席できなかった方々もあり、出席者数は例年より少なく、次の 13 名であった(敬称略、卒業順)。

大熊立治(昭 5・国史)、大坪併治(昭 10・国文)、南条正明(昭 14・心理)、中野光行(昭 26・独文)、由比濱省吾(昭 27・地理)、大羽 蓁(昭 29・心理)、福井栄一郎(昭 29・美学)、片山 智(昭 30・英文)、狩野 久(昭 31・国史)、三谷恵一 (昭 36・心理)、別府信吾(昭 41・国史)、岡本不二明(昭 47・中文)、木下鉄矢(昭 49・中哲)

幹事から会計報告、会員の現状・異動状況の報告を行ない、次期役員として会長に大熊立治氏(留任)、幹事代表三谷恵一氏、その他を選んだのち会食に移り、なごやかに歓談、自己紹介を兼ねて近況や思い出、恩師の消息などが語られた。

◇ ◇ ◇

「平城京と飛鳥の発掘の成果」

岡山大学教授 狩野 久 (昭 31・国史)

そして当日のメインである話題提供として、昨年岡山大学文学部に着任された狩野久教授から、これまで手がけてこられた平城京や飛鳥の発掘の成果について、きわめて分かりやすく興味深い説明があり、出席者からいろいろと質問も出て、時の移るのを忘れて有意義な一夜を過ごした。

[由比濱省吾記]

平成 5 年 [1993]

例会を、7 月 3 日(土)午前 10 時より岡山県立美術館にて開催した。丁度、鏑木清方展が開催されていて、梅雨の晴れ間の美しい日を楽しむことが出来た。

「鏑木清方展の解説」

岡山県立美術館学芸員 福 富 幸

清方は、明治 11 年に東京神田に生まれ、関西方面へはほとんど来ることなく昭和 47 年に 93 歳で鎌倉に没した。13 歳で水野年方に入門し、江戸浮世絵の系譜を継ぎ、18 歳ごろから独立して新聞雑誌の挿絵を手掛けた。昭和 29 年には文化勲章を受章した。

学芸員：福富 幸さんの案内により美入画、風俗画、物語絵など粋で艶麗な優品約 80 点を鑑賞した。参会者は次の通りであった。大坪併治(昭 10・国文)、南条正明(昭 14・心理)、同夫人、中野光行(昭 26・独文)、同夫人、由比濱省吾(昭 27・地理)、三谷恵一(昭 36・心理)、木下鉄矢(昭 49・中哲)、酒井 潔(昭 49・哲学)、河合保生(昭 50・地理)、小山尚史(昭 62・英文)

◇ ◇ ◇

現在の会員数は 87 名であり、最近の異動は次の通りである。

○転出者

箕浦 康子(昭 37・心理) 東大教育学部

横山 茂雄(昭 53・英文) 奈良女子大文学部

○転入者

小山 尚史(昭 62・英文) 岡大教養部

○逝去者

蜂谷 固(昭 2・東洋史)

阿部 幸子(昭 33M・英文) 岡大教育学部

○異動者

中野 光行(昭 26・独文)

岡大・岡山理大非常勤

由比濱省吾(昭 27・地理) 山陽学園短大

○叙勲

南条 正明(昭 14・心理)勲三等旭日中綬章

[三谷恵一記]

平成 6 年 [1994]

平成 6 年度は二年に一度の支部総会を開催する年に当たるが、開催を秋か冬に予定しているために、今回の支部便りは専ら幹事サイドからの報告としたい。

岡山地方も連日猛暑が続き、7 月 17 日に岡山市郊外の福渡で 39・7 度を記録した。

県北で牛や鶏が十数頭以上死亡したニュースが伝わる一方、国家公務員宿舎隣の新野の町内会放送は昨日も今朝も訃報を伝えている。

◇ ◇ ◇

『日本の人文・社会科学系大学院の現状と課題デルファイ調査』

岡山大学教授 三谷恵一 (昭 36・心理)

岡山大学の最近の動きとしては、文学部・法学部・経済学部の相互乗り入れによる後期独立博士課程「文化科学研究科」が平成 5 年度より発足した。それに先立つ 5 年間の間に、金沢大学・新潟大学と協力して『日本の人文・社会科学系大学院の現状と課題デルファイ調査』を二度実施した。対象は岡山地域 100 名、金沢地域 100 名、新潟地域 100 名、上記 3 地域を除く全国 5116 名からなる全国の有識者 816 名であった。岡山・金沢・新潟の 3 地域の有識者は産業界、教育界、行政界の分野に等分され、その他の全国からは産業界から特に 450 社と多く採られた。結果は 500 頁に及ぶ上記報告書にまとめられていいる。

文部省がこのような苦行を課した理由は次の通りである。昭和 55 年(1980)現在の日本の人文・社会科学系の博士の学位取得者は、1976 年のイギリスの 16・5 分の 1、西ドイツの 32・1 の 1、フランスの 35 分の 1、アメリカの 47・1 分の 1 である。日本の全学部学生数(1980)は、イギリス(1982)の 6・7 倍、フランス(1982)の 26 倍と非常に多くなったにもかかわらず、学部学生に対する大学院生の比率は、アメリカは日本の 3・63 倍、イギリスは 4・45 倍、フランスは 50 倍である。また昭和 60 年度までに日本の博

士の学位を授与された者のうちで、人文・社会科学系の学位取得者が占める比率はわずか3・2%である。

デルファイ調査では、以上のような事態に至った大学院の修士課程と博士課程の十分な分析に基づき、社会構造、産業構造などの変化などの諸要因を踏まえつつ、日本の人文・社会科学系大学院のあるべき姿を方向づける実証的な調査を実施した。

次に文部省が大学における一般教育と専門教育の大綱化を決めたことにより、岡山大学の教養部も本年10月1日に廃止され、百数名の教官が新しく第11学部となる環境理工学部、新しい文学部、新しい理学部に大きく三分されることになっている。文学部は人文社会科学系と語学系の教官29名を受け入れ、これまでの哲、史、文の三学科を廃止して人間学科、行動科学科、歴史文化学科、言語文化学科に改める計画である。大講座制にも改められ、学科で共通の教育体制がとられることもある。

ここ8年の間に受験人口は50万人減少するという。教官一人当たりの平均学生定員が10名であると仮定すると、約5万人の国立大学教官を削減しなければならない計算になる。県立大学化していく大学もありうる一方で、デルファイ調査に示唆されるように、博士の学位を取得するために来日する留学生が増える中、二十一世紀にふさわしい新型博士課程中心の改組を達成しえた大学のみが生き延びることができるであろう。このように考えてくると、教養部の廃止と博士課程の改革とが連合しているように思われるこの頃である。

[三谷恵一記]

平成7年 [1995]

総会を、7月1日(土)午前11時より、岡山県庁東の旭川べりの岡山県職員会館「三光荘」にて開催した。87歳になられた大熊立治会長の挨拶に続き、岡山大学名誉教授・文学博士の近藤義郎(70)先生の講演『前方後円墳の成立』を拝聴した。

大熊会長(87)は、1月11日に岡山市の榊原病院で心臓の弁を一つ取り替え、別の一つを治療するという大手術を受けられた。高齢のため20日間も意識不明が続き、その後も話せない、食べられない、歩けない状態が長く続いた。5月5日にが御見舞したが、ベッドに端坐して面会された。この様な経緯からして、総会に大熊会長が心臓のペースメーカーを体内に入れた状態で一入で歩いて姿を現わされ、実際に挨拶され共に会食されたことに一同は深く感動した。その日初めて、六ヶ月以上ぶりに一泊二日で自宅に外泊された。7月末には退院され、林原美術館長として使命を継続される予定である。



「前方後円墳の成立」

岡山大学名誉教授 近藤義郎(昭24・考古学)

近藤義郎名誉教授は、古墳や土器、副葬品や特殊器台の図面41枚を配布して30日間講演された。その中で、岡山県総社市宮山弥生墳墓群出土の特殊器台が、奈良の箸墓古墳の後円部より出土していることを指摘され、古備文化と大和の文化との交流を示唆された。まず地域ごとに倭的世界が形成され、階層差の全国的形成の過程として前方後円墳成立の歴史的意義があることを

示唆された。

近藤先生は、岡山大学を退官してから髪も増え黒くなって来たとジョークも交じえられて、「考古学と私」についても語られた。お天気にも恵まれ、空調された美しく大きな会場での二十代から八十代の卒業生の交流に日々のストレスを洗い流した。

参加者は次の 15 名であった。

大熊立治(昭 5・国史)、南条正明(昭 14・心理)、近藤義郎(昭 24・考古学)、中野光行(昭 26・独文)、小川 洋(昭 27・哲学)、由比濱省吾(昭 27・地理)、大羽 蓁(昭 29・心理)、河合 均(昭 29・国史)、山口素行(昭 31・社会)、狩野 久(昭 31・国史)、三谷惠一(昭 36・心理)、木下鉄矢(昭 49・中哲)、河合保生(昭 50・地理)、小山尚史(昭 62・英文)、石田あゆみ(平 3M・哲学史)

◇ ◇ ◇

現在の会員数は八七名であり、最近の異動は次の通りである。

○転出者

幸田正孝(昭 39・国史)

豊田工業高等専門学校

酒井 潔(昭 49・哲学) 学習院大学文学部

井上明彦(昭 57M・美学) 京都市立美術大学

○転入者

石田あゆみ(平 3M・哲学史)岡山大学文学部

山本秀樹(昭 62・国文) 岡山大学文学部

○逝去者

原田種夫(昭 4・西洋史)平成 4 年

田中準(昭 10・国文)平成 7 年 5 月 13 日

○勤務先異動

福井栄一郎(昭 29・美学)岡山大学文学部

山口素行(昭 31・社会学)岡山大学文学部

多屋頼典(昭 42・心理)岡山大学文学部

永田諒一(昭 49・西洋史)岡山大学文学部

金関 猛(昭 54・独文)岡山大学文学部

渡辺佳成(昭 54・東洋史)岡山大学文学部

小山尚久(昭 62・英文)岡山大学教育学部

戸田行賢(昭 28・哲学)

山陽学園短大・岡山理大

後神俊文(昭 32・国史)岡山朝日高等学校

柳 忠正(昭 33・英文)吉備国際大学

小橋国弘(昭 51・国史)古城池高等学校

明石幸子(昭 57・英文)倉敷商業高等学校

川端秀夫(昭 62・国文)笠岡商業高等学校

○消息不明者

秋月浩淳(昭 44・美学)

内藤匡子(昭 46・国文)

岸本正男(昭 56・国文)

菅 康弘(昭 57・社会)

◇ ◇ ◇

総会では事業報告、会計報告、事業計画、予算案等が報告検討され、の執行体制を次の通りにすることにした。

会長 大熊立治(林原美術館長)

幹事(代表)三谷惠一(岡山大学文学部)

幹事(会計)木下鉄矢(岡山大学文学部)

幹事(名簿)河合保生(朝日高)

幹事(一般)小山尚久(岡山大学教育学部)

平成 8 年の例会は、来年 6 月を予定している。御家族をお誘いの上、多数御出席下さるよう幹事一同お待ち申し上げます。

[三谷惠一記]

平成 8 年 [1996]

八年度例会を、七夕前夜の 7 月 6 日(土)の 16 時より岡山駅南の「まきび会館」二階の白鳥の間にて開催した。心臓手術のため半年以上入院しておられた大熊立治支部会

長(88)もお元気な姿を現わされ「上半身は正常になったが、足が弱っている。の活動が評判になっているのも皆様のお蔭です。林原美術館の展覧は、浦上玉堂、うつわ、はこ、秋さびて、あるく・歩く、めでたきもの、『シーボルト父子のみた日本』展、やきもの逍遥等文化史的に行って来ているが、それが好評です。京都大学における三年間の勉強が頭に染み込んでいます」と挨拶された。

次に、昭和27年哲学卒業の元岡山県立高校英語教諭で、新英語研究会全国常任委員、英語科学研究会会員の小川 洋氏(67)の講演「表現論の試み」を拝聴した。

◇ ◇ ◇

「表現論の試み」

元岡山県立高校英語教諭
新英語研究会全国常任委員
英語科学研究会会員 小川 洋(昭27・哲学)

日本的風土の中では、自己を表現し意見を述べるには勇気がいる。疎外され落ちこぼれた生徒が、「英語による作詩」を通して、表現的なもの(expressiveness)への参加と共に回復してゆく過程を強調された。次は電子科 TM 君の詩 TONIGHT の前半である。

As nobody understands me,
I am listening to the falling leaves.
As nobody understands me,
I am listening to the twinkling stars.

ここでは対象についての感動を、視覚から聴覚への移調・変形(transformation)によって再現している。

このように、まず、問題意識の発端として、なぜ表現を問題にするのかについて述

べられた。高等学校で教鞭を執られていたころの生徒の英詩に表れた自己表現に着目され、普段、英語の授業に参加しない生徒も、自己を表現する機会を与えることで、授業に参加させることができることを発見された。また、外国語である英語で自己を表現させる理由として、落ち着きのない子供が、外国語を通して自由に、自分を作っていくと、落ち着きがでてくることを取り上げられ、教育における自己表明、自己表現には自我形成の働きがあると述べられた。一方、言葉は対象を把握するきっかけになり、言葉によって対象は結晶させられ、言葉を獲得し、自己を表明することは、自己回復、自己同一のプロセスであると述べられた。更に、表現そのものについて、表現的なものとは何かという観点から、移調による表現、変形による表現、再現による表現、語における表現性について語られた。

[小山尚史記]

続いて会場をエメラルドの間に移し、昭和22年西洋史卒の服部恒雄氏の音頭で乾杯し、刺身や煮付けが次々と運ばれる瀬戸内の会席料理をビールとワインで賞味した。当日を挟んで梅雨は休止していて、日暮と共に宴は酣となった。

文月や六日も常の夜には似ず 芭蕉

◇ ◇ ◇

参会者は次の十三名であった。

大熊立治 林原美術館長 (昭5・国史)
南条正明 岡山商大名誉教授 (昭14・心理)
服部恒雄 服部物産社長 (昭22・西洋史)
中野光行 岡大名誉教授 (昭26・独文)
小川 洋 元岡山県立高教諭 (昭27・哲学)

由比濱省吾 山陽学園大教授 (昭 27・地理)
 黒崎嘉一 山陽放送顧問 (昭 29・独文)
 三谷恵一 岡大文学部教授 (昭 36・心理)
 名木田薫 倉敷芸科大教授 (昭 42・基督教)
 河合保生 岡山朝日高教諭 (昭 50・地理)
 鷹家秀史 岡山朝日高教諭 (昭 55・米文)
 明石幸子 倉敷商業高校教諭 (昭 57・英文)
 小山尚史 岡大教育学部講師 (昭 62・教育)

河合幹事により新たに 37 名の会員が発見され、現在は 124 名である。最近の異動は次の通りである。

○転出者

山本淑子 (昭 50・心理)

○転入者

北岡武司 (昭 51・M54 D 西哲) 岡大文学部

柏木寧子 (昭 62・仏文) 岡大薬学部

○叙勲

石田 寛 (昭 17・地理) 勲三等瑞宝章

○逝去者

中野久夫 (昭 15・英文) 平成 7 年 1 月 3 日

なお、幹事会を岡山朝日高で開催した後、その東にある第六高等学校記念館を見学した。長野岡山県知事、大藤・高橋岡大学長、吉永検事総長等一万二千余名を輩出した六高は明治 33 年(1900)に創設され、昭和 24 年に岡大に包括された。平成 7 年 11 月に六高創立九五周年記念祭が挙行され、『操陵のもと春逝かば』の群像が建立された。

[三谷恵一記]

平成 9 年 [1997]

平成 9 年 2 月 23 日、大熊立治会長、財団法人林原美術館長が脳梗塞のため死去した。

行年八十八であった。長女立代^{ちつよ}さんを喪主とする蕃山町本行寺における葬儀・告別式に支部代表も列席した。故大熊氏は、昭和 56 年から 16 年間会長を務めた。旧制六高、昭和 5 年京都帝大文学部国史卒。昭和 16 年から岡山県立図書館長、32 年県総合文化センター初代館長、39 年オープンした岡山美術館(61 年林原美術館に名称変更)の館長を務め、優れた企画展、特別展を次々と開催し、岡山県文化賞、山陽新聞賞、三木記念賞などを受章、岡山県文化財保護審議会会長、岡山カルチャーゾーン連絡協議会会長なども務めた(山陽新聞)。由比濱幹事の取り計らいで、会も岡山城南の林原美術館でしばしば開催され、平家物語絵巻や池田家の歴代大名の好んだ重要文化財の能装束の前で説明され、ロビーで抹茶を賞味してリフレッシュした。森山泰男林原美術館事務長によると館長の後任は未定であるが、昨年オープンしたレストラン「ルネッサンス」と一帯となり人気は更に上昇しているという。

◇ ◇ ◇

九年度総会を、7 月 5 日(土)の 16 時より岡山市尾上神道山の黒住教本部にて開催した。第一部は参拝、講演会、宝物館見学にあて、第二部は会食と事務連絡にあて、閉会したのは 20 時を過ぎていた。岡山市の気温は 36 度に急上昇したのに、海拔 100 メートルの総檜の大教殿にはさわやかな山風が流れた。

第一部

次に、会場を黒住教宝物館(まることセンター)に移し、昭和 35 年哲学科心理学専攻卒、36 年大学院文学研究科中退の黒住宗晴

教主の講演『宗教心の本質について』を拝聴した。左右の壁には、横尾忠則によるタペストリーとステンドグラスが在る。



「宗教心の本質について」

黒住教教主 黒住宗晴（昭35・心理）

本年は岡山城築城 400 年にあたるが、それに先立つ 17 年前に、天照太神、八幡神社、春日大社の三社をまつた岡山藩守護神社：三社宮（今の丸の内中学のあたり）の神職を黒住家が務めていた。それから 200 年後の文化 11 年（1780）の冬至に肺病を患っていた 14 歳の教祖黒住宗忠は大元の地で日の出を拝んで天命直授して立教した。

嘉永三年（1850）の教祖昇天を機に高弟七人衆が関西中心に布教を開始し、文久二年（1862）に京都吉田神社の東南に「神楽岡・宗忠神社」が鎮座し、孝明天皇の勅願所となり、幕末の混乱期に光を与えた。もっとも公卿の七京落等しちけおちの拠点ともなり、岡山藩が警護したこともあり、岡山にも神社をと希望は江戸時代には適えられなかった。

明治 18 年（1885）に「大元・宗忠神社」が鎮座し、その後大教殿も並置された。しかし、新幹線、大道路、ビルラッシュと時代が進み、御日拝も困難となった。そこで、神奈備山である吉備の中山の東南一帯の昔から神道山と呼ばれていた 10 万坪のこの地を 157 人の地主より譲り受け、大教殿を中心に「黒住教本部」を移設した。「大元・宗忠神社」は今も大元の地に在る。ここで去る 5 月 24 日神戸で起こった 14 歳少年による 11 歳少年殺人事件を考えてみたい。多くの宗教と同様に、黒住教も人間を「心」と「身体」ととどめずに、「心の中の心」の

存在を大切にする。心の中の心とは、太陽に象徴される天照太神の＜分心＞であり＜内なる太陽＞である。仏教の阿頼耶識あらやしき、キリスト教の聖霊にあたるもの、いわゆる＜魂＞である。心は分心が鎮まる所であるから、罪・汚れ・気が枯れずに「まろやか」であり続ける様に戒め続ける日常生活が即修行であるとする。

私自身の次男の子である 3 ヶ月の孫を抱いて目を見入っていると、ものすごく深い目、「魂（分心）の目」が働いているのにハッとさせられる。この幼な子にとって、母親を中心とする身近な大人との交流は大変に貴重な時間であり、その時に十分なケアをせずにおいてはならない。母乳主義者であった故山内逸郎国立岡山病院長は、ブラジルにストリート・チルドレンの多い最大の原因は、出産の五割を帝王切開によっているためと申しておられた。幼い子どもの魂（分心）を育てることに手を抜いておいて、学校によろしく、20 歳になりましたというのでは、あぶないもの。人間としての基礎づくりが出来ていない。本年 8 月の比叡山宗教サミットでは、日本の神道を代表して 35 歳の長男が世界から集まる宗教者に、人間が人間の魂（分心）を育てることをしなければ人類の滅亡につながるとスピーチすることになっている、と結ばれた。

・心は大磐石の如くおし鎮め

気分は朝日の如く勇ましくせよ

・有り難きまた面白き嬉しきと

みきを備うぞ誠なりける

第二部

続いて会場を教主公邸に移し、備前焼に刺身等が並ぶ前で故大熊会長に黙祷を捧げ

た。大床からは、故平澤興総長の書「敬神導入」が慈眼を垂れていた。昭和 29 年美学卒の福井栄一郎岡大名誉教授の音頭で乾杯し、鯉のたたきと大元なべ、屋久島の水と岡山米による神酒を心ゆくまで賞味した。

参加者は次の 13 名であった。

南条正明 岡大名誉教授 (昭 14・心理)
渡辺 荘 (昭 23・哲学)
大羽 蓁 川崎医療福祉大教授 (昭 29・心理)
福井栄一郎 岡大名誉教授 (昭 29・美学)
山田茂昭 山陽新聞社 (昭 33・独文)
黒住宗晴 黒住教教主 (昭 35・心理)
三谷恵一 岡大文学部教授 (昭 36・心理)
岡本不二明 岡大文学部教授 (昭 49・中文)
河合保生 岡山朝日高教諭 (昭 50・地理)
石原利博 ナイスネットワーク (昭 55・地理)
鷹家秀史 岡山朝日高教諭 (昭 55・米文)
小山尚史 岡大教育学部講師 (昭 62・教育)
植木 綾 岡山協立病院 (平 2・心理)

来年度例会にて会長と監査幹事を選ぶことにして、教主に見送られて特別バスにて神道山を下った。夜八時半であった。

[三谷恵一記]

平成 10 年 [1998]

平成 10 年度総会を、6 月 27 日(土)16 時より岡山市下石井のまきび会館にて開催した。例年のとおり、第一部として総会行事がもたれた。まず三谷恵一代表幹事から平成 9 年度における支部の活動状況と会計について報告があった。この中で以文会本部(京都)の状況、平成 10 年 1 月 29 日に開催された岡山京大会に以文会支部会員から 11 名の参加があったことをはじめ、平成 9 年

2 月に亡くなられた大熊立治前支部会長のご遺族から本会に寄付を戴いたことなどが報告された。次に会員名簿担当幹事の河合から支部会員数 123 名であるが、一部音信不通もあるので近々精査する旨と、最近の会員異動について報告があった。次に懸案の新会長選出に入ったが、数人の候補者をあげるにとどまり、決定は第二部の懇親会に持ち越されることとなった。

続いて昭和 55 年史学科地理学専攻卒で(株)ナイスネットワーク勤務の石原利博氏の講演、「アンデス文化の側面 ― 近くて遠きはフジモリ大統領 ―、― 遠くて近いインカ文明 ―」を拝聴した。要旨は次のとおり。



「アンデス文化の側面―近くて遠きはフジモリ大統領、遠くて近いインカ文明」

(株)ナイスネットワーク 石原 利博
(昭 55・地理)

はじめにペルーとアンデスの特異な自然環境の解説があった。低緯度の海岸低地でありながら気温が低く砂漠が発達するメカニズムを明らかにし、次に「中央アンデス文化圏」が栄えた理由を、自然と文化の両面から解き明かした。すなわち、低地の太平洋岸は寒流のペルー海流の影響で砂漠の広がる乾燥気候地帯であるのに対し、アンデス高地は氷河から供給される水が豊富に存在することと、低緯度に位置する高地であるため、3~4 千 m でも人が住める気温であること、という自然環境からの説明があった。また冷涼気候に強く痩せた土地でも育つアンデス原産のジャガイモの存在と、ラクダ科家畜のリャマ・アルパカが、4000m

付近に育つイチュという草のみを餌にすることから、荷役、食肉、防寒用の毛を求めて、人間の方がリヤマ・アルパカの生息地に上がって行ったとの説が紹介された。

本論として、インカ文明と日本の接点について話題を進めた。学説では氷河期に陸続きであったベーリング海峡をアジア方面から渡ったのがアンデス先住民の祖先で、一万年ほど前に海となってから交流が途絶えたとする。しかし、インカ帝国の公用語で、現在もペルーの公用語であるケチュア語が、日本語やアルタイ語族の言語と近似性があること、ケチュア族が身体的にも他の南米の諸族と比べモンゴロイドの特徴を多く保っていること、インカ文化がそれ以前のアンデス文化を踏襲せず独自性が強いことなどから、1000～2000年前に太平洋を渡ってアジア方面から何らかの偶発的な交流があったのでは、という自説を述べた。紀元前500年前にアンデス高地に栄えたチャビン文化と、メキシコ低湿地に発達したオルメカ文化が距離で数千kmも離れながら、同時期によく似た文化が生まれた例も紹介した。

このうち、日本語・トルコ語・ケチュア語の類似性について次の観点から解説がなされた。

○日本語との語順比較

【トルコ語】モンゴル語・ツングース語とともにアルタイ語族の言語。

【ケチュア語】インカ帝国の公用語。アンデス地方で現在も広く使用されている。

○次の文章では、日本語と語順が同じ。

【日本語】
この 少女 は 学校 へ 行きます。

a b c d e f

※前置詞を使わず、名詞の後に「は」「へ」などの助詞を使用。

【トルコ語】

Bu kiz okul-a gidi yor.

a b d e f

※助詞「は」は、使用しない。

【ケチュア語】

Kay warmi wawa-qa isk wila-man rin.

a b c d e f

次にフジモリ大統領に話題を移した。フジモリ氏は最初の選挙の時は泡沫候補とされながら、1回目の投票で二位、決選投票で一位となったことで知られる。ところがフシモリ氏は日系人社会とほとんど交流がなく、選挙運動では日系人を当てにせず、ペルー人として選挙戦に臨んだ。対国会でも妥協より強権発動で対処した。ペルー大使公邸占拠事件でも、日本政府との対話は時間稼ぎのためで、日本政府の要請は全く相手にしていなかったとされる。日系二世でも日本人とは縁遠いものであった。人質救出作戦名もチャビンデワンタールと神殿遺跡に因んだものであったのも象徴的である。

石原氏は、学術の専門家ではない眼で見たアンデスの報告と謙遜されたが、地理出身者らしく、自然環境・社会環境の両面からアンデス文化とペルー情勢をわかりやすく解説していただいた。アジアとりわけ日本との比較文化の観点からの講話は、机上研究だけではなく現地での実体験が何よりも大切であることを改めて教えていただいた

た。特に「ペルーでは自転車は外で乗るものではない」とか、「ラパスでは火事がほとんどない」のことばには、南米特有の地域性を感じることができた。これを契機に現地へ行ってみたい衝動にかられた参加者も多かったものと思う。

◇ ◇ ◇

講演後会場を白鳥の間に移し、昭和 10 年国文卒の大坪併次岡大名誉教授の発声で乾杯し、第二部の懇親会に入った。記念撮影後の近況報告では、久々の参加の方もおられ、それぞれ熱き思いを述べられたため予定時間を超過する一コマもあった。閉会近くになって、懸案の新会長選出について、元代表幹事として永年にわたり以文会の運営に当たってこられた由比濱省吾岡大名誉教授を推挙する声が高まり、参加者の総意で就任をお願いすることになった。最後に由比濱氏の挨拶をもって、閉会としたのは午後 8 時であった。

なお参加者は次の 10 名であった。

◇ ◇ ◇

大坪併次 岡大名誉教授 (昭 10・国文)
南条正明 岡大名誉教授 (昭 14・心理)
服部恒雄 服部物産合資会社社長
(昭 22・西洋史)
由比濱省吾 岡大名誉教授 (昭 27・地理)
大羽 秦 岡大名誉教授、川崎医療福祉大
教授 (昭 29・心理)
三谷恵一 岡大文学部教授 (昭 36・心理)
河合保生 岡山朝日高教諭 (昭 50・地理)
小橋国広 倉敷古城池高教諭 (昭 51・国史)
石原利博 (株)ナイスネットワーク
(昭 55・地理)
鷹家秀史 岡山朝日高教諭 (昭 55・米文)

最近の異動状況

○転出者

福井栄一郎(昭 29・美学) 東京都多摩市
島岡八郎(昭 41・社会) 福岡県北九州市

○逝去者

森定昭夫(昭 26・独文) 平成 10 年 3 月

○勤務先等の異動

大坪併治(昭 10・国文) 岡山大名誉教授
由比濱省吾(昭 27・地理) 岡山大名誉教授、
山陽学園大講師

大羽 葵(昭 29・心理) 岡山大名誉教授、
川崎医療福祉大教授

山口素光(昭 31・社会) 岡山大名誉教授
平岡行雄(昭 51・仏文) 総社高校

○改姓者

石田あゆみ(平 3M、平 6D・哲学史)

→竹島あゆみ

[河合保生記]

平成 11 年 [1999]

平成 11 年度総会を、7 月 4 日(日)10 時 30 分より金光町にて開催した。今回は会員であり、金光教の教務総長である森定 齋氏(昭 34・宗教学)を通じて金光教本部を訪問し、諸施設を見学した。前日まで続いていた連日の大雨で、当地ほか近県でも多くの被害が出ており、天候が懸念されたが、当日は晴天に恵まれた。なお、金光教本部は現在、森定氏をはじめとして 4 人の会員が「ご用」と表現される仕事をしている。

10 時 30 分、金光駅にて会員であり、金光教の教学研究所部長の竹部 弘賃(昭 57・国史)と布教部職員の古川義人氏(昭 63・宗教学)の出迎えを受け、車で金光教本部教庁四階会議室へ移動。本部教庁では、教務総

長夫妻、布教部長、総務部次長の出迎えを受けた。

まず、受け入れ側の金光教を代表して、義父が会員であった総務部次長の松田敬一氏、続いて教務総長の森定 齋氏から「歓迎のあいさつ」を受けた。引き続き竹部弘氏から日程説明を受けた後、布教部長の岡勝繁氏(昭 38M・宗教学)の「金光教概説」を拝聴した。



「金光教概説」

金光教布教部長

岡 勝繁(昭 38M・宗教学)

概説は、金光教ガイド『よろこびの世界』をもとに金光教の教祖と信心、文化活動、社会活動等が紹介された。金光教の教祖・金光大神(こんこうだいじん)は 1814 年(文化 11 年)9 月 29 日、現在の岡山県金光町に農民 香取十平・しもの次男として生まれ、12 歳で川手家の養子となった。13 から 14 歳で庄屋・小野光右衛門から手習いを受け、勤勉実直に農業や村の仕事に励む中、社会的信用も得た。しかし、家族や飼い牛を次々と亡くし、さらに自身も 42 歳のとき大病にかかり、死に直面した。その時、知らず知らずのうちに神に無礼してきたことを悟り、心から神に詫び、病気が全快した。その体験を通して、崇りさわりの神と恐れられていた金神(こんじん)が、人間の助かりを願ってやまない神であることを確信し、いっそう信仰を深め、何事も神に願い任せる生活を進めていった。そうした独自の信心生活の中で数々の霊験(おかげ)が現れ、難儀を抱えた人々がしだいに金光大神の元を訪れるようになった。1859 年(安政 6 年)46 歳

の時、神(天地金乃神)の頼みのままに農業をやめ、人の願いを神に伝え、神の願いを人に伝える「取次(とりつぎ)」に専念、自宅を開放して「広前」とした(金光教の立教)。その後、他宗派からの迫害もあったが、布教公認を得て信心が広まり、1868 年(明治元年)、神から「生神金光大神」という神号を授かった。しかし、その後、政府の宗教政策により布教資格を失い、1873 年(明治 6 年)広前が閉鎖された。その事態を経て、神名(「天地金乃神」)を中央に記し、生神金光大神の取次によって、神と人とが「あいよかけよ」で共に助かる信心の要諦・拠り所を簡潔に図示した「天地書附」が定まった。そして、明治 16 年 70 歳で亡くなるまで、取次の座にあって、人々の助かりを祈念するとともに、天地金乃神の神性や「神と人とあいよかけよで立ち行くあり方を世界に現す」との神の願い、「神の子」としての人間の生き方を伝え、習俗、男女や身分の差別など、既成の価値観や禁忌に縛られない自由な広い信心の道へ導いた。教祖没後は、その「取次」によって救われた人達の中から、各地にあって同じく「取次」に従事する人が現れることとなり、このことが今日の教会設立の出発点となった。現在、日本国内に約 1600 教会、韓国、ハワイ、アメリカ、カナダ、ブラジル、パラグアイに 27 の教会、拠点がある。

金光教では、神と人間との関係を「人間あつての神 神あつての人間」と押さえている。人間は人間の力だけで生きているのではなく、神の恵みの中に生かされて生きているのであり、神もまた、神だけでそのはたらきを現すのではなく、人間を通して生きたはたらきを現す、という関係にある、

と。このような神と人間との関係、そしてその関係のみにとどまらず、人間と人間、人間と社会、人間と万物といった関係の中においても、それぞれがそれぞれの中身になり合いながら共に助かり立ち行こうとしていく実践原理を「あいよかけよ」と言っていて大切にしている。

文化・教育活動としては、全国各地での公開講演会、毎日文化センター宗教講座、典楽、コーラス活動などを行っている。また、約二十万冊と点字図書約一万五千冊を蔵し、岡山県でも有数の私立図書館である金光図書館があり、特色ある宗教図書館を目指している。さらに、学校教育にかかわっては、次代を担う人材育成が教団の活動方針に掲げられており、金光教系の中学校・高等学校には、1894年創立という歴史を有する金光学園中学校・高等学校(岡山県金光町)をはじめ、金光藤蔭高等学校(大阪市)、金光八尾中学・高等学校(大阪府八尾市)、金光大阪中学校・高等学校(大阪府高槻市)がある。大学は、関西福祉大学(兵庫県赤穂市)が「人間平等」「個性尊重」「和と感謝」の精神を建学理念として平成9年に開学した。

社会活動としては、主に全国の信奉者から寄せられた「一食をささげるチャリティー」献金を基に、NGOである金光教平和活動センターが中心となったタイ・フィリピンでのスラム開発や幼児教育などの国際協力活動、広島、長崎、東京での平和集会、点訳奉仕、全国の刑務所や少年院などでの教誨等の紹介があった。なお、来年は金光教が神道本局から独立して百年目の節年にあたり、記念映画の制作などの奉迎準備に取り組んでいるなど、現在の教団活動が紹

介された。

布教部長による概説拝聴後、引き続き、金光教本部諸施設の案内ビデオ「金光教本部へようこそ」を拝見した。

II

次に、昼食会場である町内のレストラン「きの味」へ移動。最初に参加者全員で故土岐邦夫氏(昭28・哲学)と故福井栄一郎氏(昭29・美学・37D)に黙祷を捧げた。続いて総会行事に移り、三谷恵一代表幹事より事業報告・会計報告、河合保生幹事より会員の異動状況報告がなされた。その後、服部恒雄氏(昭22・西洋史)の音頭で乾杯し、地物を素材とした洋食をいただきつつ、自己紹介を挟みながら約2時間の懇談となった。

III

会食後、再び金光教本部へ移動。祈りの場である228畳敷の広い会堂に参拝。三谷代表幹事が参加者を代表して「お結界」(会堂の右端にある「取次」の場)へ進み、金光教教主の金光平輝氏に金光教本部訪問の挨拶をした。現教主は教祖から代を重ねて五代目にあたり、歴代の教主は教祖に倣い、一日も欠かすことなく、午前3時50分に広前に出仕し、午前4時からのお祈りの後、午後4時40分に広前を退出するまで、昼の休憩を除いて「お結界」に座り続け、参拝者の願いや悩み事を聴き、神の願いや教えを参拝者に話す「取次」に従事しているという。普通、教団のトップの方にお目にかかるのには、事前に電話をすとか、何らかの手続きがいりそうな気がするが、だれでも、いつでも、教主にお目にかかって話を聞くことができ、しかも、土日・祭日なしで一日中お結界に座り取次をしておられ

るという、そのご様子に、参加した会員はみなたいへん感動した。

続いて竹部氏の案内で教祖奥城、教学研究所、金光図書館を訪問し、金光教本部諸施設の訪問を終えた。図書館には開架で約五万冊、書庫をあわせて二十万冊の蔵書があり、なかでも戦前の児童書、レコード、新聞の縮刷版、雑誌類の収集には特筆するものがあり、全国の研究者から注目される図書も多いことをお聞きした。空調が利いた完全防火システムの書庫も見学させていただき、時間の都合で一部分しか見ることができなかったものの、その蔵書数だけでなく、図書の管理状況のすばらしさに一同大きな感銘を受けた。名残もつきないものの、予定時間となったため、15 時 50 分、森定氏夫妻に見送られ、金光教本部を後にし、竹部氏、古川氏運転の車で金光駅へ向かった。

平成 12 年度は、服部恒雄氏のお世話で牛窓訪問の予定である。参加者は次の 11 名であった。

◇ ◇ ◇

南条正明 岡山大・岡山商大名誉教授
(昭 14・心理)

服部恒雄 服部物産合資会社社長
(昭 22・西洋史)

渡辺 荘 (昭 23・哲学)

中野光行 岡山大名誉教授 (昭 26・独文)

森定 齋 金光教教務総長 (昭 34・宗教)

三谷恵一 岡山大文学部教授 (昭 36・心理)

岡 勝繁 金光教布教部長 (昭 38M・宗教)

河合保生 岡山朝日高教諭 (昭 50・地理)

石原利博 ㈱ナイスネットワーク
(昭 55・地理)

竹部 弘 金光教 教学研究所部長

(昭 57・国史)

古川義人 金光教布教部員 (昭 62・宗教)
他に森定氏夫人の参加があった。

○転出者

天野 恵(昭 51・伊文) 京都大学
高阪松太郎(昭 35・宗教)

三重県伊勢市 金光教伊勢教会
(平成 10 年 10 月)

○転入者

新田一郎(昭 34・西洋史)
就実女子大文学部

山本順子(旧姓大塚)(昭 50・心理)

今津勝紀(平 3D・国史)

永原順子(平 4・中文)

○勤務先等の異動

狩野久(昭 31、38D・国史) 京都橘女子大
(平成 11 年 4 月)

[古川義人・河合保生記]

平成 12 年 [2000]

平成 12 年度総会を、7 月 1 日(土)牛窓町にて開催した。当日は梅雨の最中でありながら好天に恵まれ、13 名の会員が参集した。今回は服部物産合資会社社長である服部恒雄氏(昭 22・西洋史)のご厚意により開催が実現した。11 時服部邸へ到着し、壮大な長屋門をくぐる。しばらく休憩の援、二十畳の大広間にて、服部氏から「地主史としての大型家屋の機能」の題で講話をいただいた。要旨は次のとおり。

◇ ◇ ◇

「地主史としての大型家屋の機能」

服部物産合資会社社長 服部 恒雄
(昭 22・西洋史)

西服部家(岡山県邑久郡牛窓町)が延宝元年(1674年)邑久郡長船町畠田より牛窓町に移住して327年になる。文久元年(1861)服部平五郎^{のぶやす}信恭(1841~1934)が十世として当主となると土地の収集が始まり、大正年間には朝鮮を含めて千町歩大地主となった。平五郎は財産を蓄えるだけでは家は長続きしないことに気づく。家を永続させるためには理念(コンセプト)と制度(システム)が必要だと考える。その核をなすものは先祖崇拜と家庭教育であり、先祖崇拜は政(まつりごと)であり、家庭教育は道德(モラル)であると考えた。そこから、彼独特の家政(ポリシー)が生まれる。そして、彼はそれを「大本家(おおぼんけ)」と呼んだ。

大本家は初め、ただ制度と帳簿の上にだけある無形のもので、皆にはその制度の真意がよく分からなかった。そこで、彼は、服部家の家産を管理増殖し、彼の理念を敷衍し、大本家制度を執行展開するための家父長的空間システムと機関を備え、服部平五郎を具体(ヴィジュアル)化し、住まわせる屋敷を必要とした。平五郎は明治33年3月家屋を新築することを決め、工事は町内に住む大工、棟梁森国吉によって進められ、四年がかりで明治37年(1904年)にひとまず完成する。

この家屋の特徴は、まず第一に挙げたいのは、この建設のプロセスが大本家制度という独特の「家」の理念に対応し、極めて計画的になされていること。第二の特徴はこの建物が明治37年で完成されたわけで

なく、平五郎が次々に繰り出す家政執行にあわせて大正5年まで続けられたこと。第三には、^{まつりごと}「政」をする大広間と宗廟を私的な空間とは精神的にも物理的にも厳密に区別されていることである。従って、財力に応じて地位を保持し、誇示するために造られた豪華な大型家屋とは外見的にも内容的にも、その様相を異にしているといえよう。

戦前の日本の資本主義と君主封建制国家(天皇制国家)の性格を背景した旧態勢の地主制度の中で、各々の大地主は、資本主義経済のかかわりあいの濃淡や小作争議にみられるような農民運動の強弱などによって、置かれている地域の諸条件や各家の経営方針や考え方によって多様に展開していくのであるが、服部家が、東北水稻単作地帯や東山養蚕地帯と違って、近畿先進農業地帯にあったということは、地主の経営方針と進路に多大の影響を及ぼしていることは否めない。

服部家が早くから、「寄生地主」からの脱却を目論み、有価証券投資家(レントナー)としての性格を強め、ひいては、朝鮮進出により「農場経営」という企業地主の転換を日目論んだことは時代性や地域性を考えれば必然のことだといえる。

敗戦と同時に地主は終焉を迎える。農地改革以後は、すべての土地財産を失うわけであるが、辛うじて没収を逃れた山林や鉱山は平五郎亡き後、産業企業経営としてオリーブ農園の経営や、石灰鉱山の開発など、活路を見いだすことになる。

これは、平五郎が絶対タブーとした鉱山＝山師、埋立、手作、他人資本＝借入金、出資金、この三つの行為に違反する。しかし、そうせざるをえない時代の流れの絶対

性の中で平五郎が考えた「永続性」とは何であるかをもう一度問いなおす必要がある。

◇ ◇ ◇

講話拝聴の後、邸内の見学をさせていた
だいた。服部氏は、「壮大さは必要だが立派
は望まぬ」の考えに基づき、過剰な贅沢や
華美を排してこの邸宅が建築された旨を話
された。確かに極端な華美感は除かれてい
るものの、奥に一段高い十畳間を持つ二十
畳の大広間や仏間をはじめ、裏座敷広縁か
ら見た庭園からは、邸宅の名にふさわしい
格式と日本民家の伝統をひしひしと感ずる
ことができた。なお、服部邸については『住
宅建築』1999年1月号に「生きつづける民
家」として紹介されている。

さて、参加者は長屋門の前で記念撮影を
行った後、懇親会場のホテル「リマーニ」
へ移動し、総会を兼ねた昼食会を行った。
由比濱会長挨拶の後、各会員の自己紹介と
近況報告を行い懇親を深めた。あわせて三
谷幹事から事業報告、河合幹事から会員動
静、古川幹事から会計報告がなされた。

会食後、海遊文化館にて朝鮮通信使資料
と県指定重要有形民俗文化財のだんじり
を見学、次に法華宗の古刹「本蓮寺」で朝
鮮通信使の接待処にあてられた客殿や小堀
遠州作の庭園を見学した。瀬戸内海が望ま
れる本堂では藤井学氏より歴史学の観点か
ら解説を受けた。その後、古い家並みが残
る関町から東町、東服部家を経て、オリーブ
園に登った。オリーブ園からは日本のエー
ゲ海を自認する牛窓の代表的景観である瀬
戸内海の多島美を堪能した。オーナーの服
部氏をはじめ、由比濱氏からも地理学的な
説明を受けた。

レストハウスで休憩の後、陽光もだいぶ

西に傾きかけたため、一同名残を借しみな
がらも牛窓の地を辞し、17時30分邑久駅
にて解散した。会員の服部氏には講話をは
じめ、懇親会場の手配、町内の名跡の案内
までいただき、しかも名産のオリーブオイ
ルまでおみやげに頂戴するなど、大変なお
骨折りをいただいた。おかげで大変有意義
な会となり、参加者一同、深く感謝したし
たいです。なお、平成13年度は津山で開会
の予定。

◇ ◇ ◇

参加者は次の13名であった。

南条正明 岡山大名誉教授・岡山商大名誉教
授 (昭14・心理)

服部恒雄 服部物産合資会社社長
(昭22・西洋史)

渡辺 荘 (昭23・哲学)

中野光行 岡山大名誉教授 (昭26・独文)

由比濱省吾 岡山大名誉教授 (昭27・地理)

藤井 学 京都府立大名誉教授・奈良大学長
(昭30M、34D・国史)

柳 患 正 岡山大講師 (昭33・英文)

三谷 惠一 岡山大文学部教授 (昭36・心理)

岡本不二明 岡山大文学部教授 (昭49・中文)

河合保生 岡山朝日高教諭 (昭50・地理)

石原利博 (旧姓 鎌尾) 旅行業 (自営)
(昭55・地理)

古川義人 金光教本部 (昭63・宗教)

植木 綾 岡山協立病院 (平2・心理)

◇ ◇ ◇

○逝去者

黒碕嘉一 (昭29・独文) 平成12年1月

若林達也 (昭31・仏文) 平成12年1月

○転出者

平松修治 (昭63・美学) 東京都

○勤務先等の異動

大羽 葵 (昭 29、34D・心理)近畿福祉大
(平成 12 年 4 月)

山口素光 (昭 31、36D・社会)

広島国際学院大 (平成 12 年 4 月)

柳 忠正 (昭 33・英文)

岡山大 (講師) (平成 12 年 4 月)

小橋国広 (昭 51・国史)

岡山大安寺高校 (平成 12 年 4 月)

[河合保生記]

平成 13 年 [2001]

平成 13 年度総会を、7 月 7 日 (土)岡山市
下石井のまきび会館にて開催した。当日は
昨年同様梅雨の中休みで好天に恵まれ、16
名の会員が参集した。16 時に由比濱省吾会
長 (岡山大学名誉教授)の挨拶により開会。
先ず、三谷恵一幹事より平成 12 年度の事業
報告がなされた後、支部活動に多大のご功
績があり平成 13 年 1 月に逝去された元会員
の安藤正瑛氏 (岡山大学名誉教授、文学博
士)のご冥福を祈念して黙祷をささげた。安
藤氏の略歴は次のとおり。

◇ ◇ ◇

○安藤正瑛先生略歴

岡山大学文学部名誉教授の安藤正瑛先生
が、平成 13 年 1 月 30 日肺炎のため岡山市
の病院で死去された。享年 88 歳、文学博
士・京都大。昭和 10 年京都帝大文学部英文
学専攻卒。

著書に『エマソンとその辺縁』関書院、
『禅と基督教一人間・このすばらしきもの』、
『アメリカ文学と禅 — サリンジャーの世界
』、『Zen and American
Transcendentalism』、『ウィラー・キャザー
「教授の家」』、『ニューイングランド文学精

神の諸相』、『さとの構造 — 東西の禅的
人間像』、『ソール・ベロウの世界』、『続 さ
との構造 — 前後裁断・さわやかに生きる』
などがあり、大学院<英米文学専攻>
を創設した。

従来、日本においては英米文学研究を基
督教的見地よりなす少数の学者はあったが、
これを東洋的、禅の見地から推し進め、そ
の成果によって欧米の学会から高い評価を
受けている。主に、エマソン、ホーソン、
トマス・ウルフ、ホイットマン、ソーロー、
ヘミングウェイ、ウィラー・キャザー、サ
リンジャー、アーヴィング、スタインベッ
ク、ジャック・ケルアック、メルヴィル、
ディキンソン、ニューイングランド超絶主
義と禅、マラマッド、ソウル・ベロウなど
を講義した。

次に河合保生幹事から会員数 110 名、う
ち旧制 25 名、新制 85 名である旨と最近の
会員動静についての説明があり、会員有資
格者の情報提供の依頼がなされた。続いて
古川義人幹事から会計報告、三谷幹事から
平成 13 年度事業計画及び平成 14 年度総会
の予定説明がなされた。事業計画では『以
文会活動の百年』の編纂と、今年度予定し
ていて実現できなかった津山での総会開催
が提案された。また、古川幹事が海外勤務
となるため、竹部 弘氏 (金光教本部)も幹
事とすることも提案され、了承された。続
いて支部恒例となった講演会に入った。今
回は岡山大学文学部行動科学科心理学講座
教授で支部幹事でもある三谷恵一氏 (昭
36・心理)から、「身体から入るリラクセー
ション — 新漸進的弛緩法 —」の題で講話
をいただいた。豊富な資料や実験の写真を
もとに、非常にわかりやすくご教示いた

いた。はじめに提示された三谷式 SUD アンケートでは、各自の無意識の緊張度が計算され、リラクセーションが必要と感じた会員が多かったようである。要旨は次のとおり。



「身体から入るリラクセーション

—新漸進的弛緩法—

岡山大学教授 三谷 恵一

(昭 36・心理、40D 中退)

心を追いつめる質問やカウンセリンクを後回しにして、まず身体から入って心のリラクセーションを達成する行動療法がある。

①実験心理学者 Jacobson(1929)が開発し、72 年の歴史を持つ漸進的弛緩法(PR)、②Schultz and Luthe(1959)による 42 年の歴史を持つ自律訓練法(AT)、③Kamiya(1968)やBrown(1970)による 33 年の歴史を持つバイオフィードバック法(BF)がある。PRを改革した新漸進的弛緩法(NPR: New Progressive Relaxation by Mitani Method))の骨子は次のとおりである。

◆リラックスするには、手・足・口・目・腹などの 1030 個の骨格筋の一グループを 100%の強さで二分間、60%で二分間、30%で 2 分間と間歇的に「いったん緊張させては 5 分間リラックスする」ことである。◆それにより神経 — 筋回路の慢性的緊張はリセットされる。筋肉全体は体重の半分を占める。◆そのメカニズムは、大脳左半球にある言語領野のイライラした内言(covert speech)がリセットされることにある。◆イライラ・不安はウェルニッケ言語受容野とブローカ言語出力野のサブルーチンをめぐる神経(心)の興奮であり、首でクロスして

右足先まで至る筋回路(身体)をも慢性的に緊張させる。従って「ことば使い」と「想い」の大切さが示唆される。◆オペラント(自力)NPR とリスポンデント NPR とがある。◆左手首を二分間全身全霊で反らすオペラント NPR により全身の積分筋電位(IEMG)及び無関連な「額」の IEMG が減衰する。従って、そのメカニズムは疲労によるものではない。脳波の I_{α} 値も減衰する。◆リスポンデント NPR として<間歌振動チェアー>、非言語脳である右脳を狙ったピアノ曲などの<間歌クラシック音楽>、<間歌芳香>などがある。◆小児の場合、大人が右足首を捉える他力的・自力法も効果的である。◆イライラ度である主観的障害単位(SUD: subjective unit of disturbance)が減衰する。◆常に「心に麗しき内言を、唇に楽しき外言を」心掛ける。◆治療者は、患者の醜き内言を想記させる心の悩みについて質問しないようにする。独り言のように、美しい外言を発することである。◆右足首による他力的オペラント NPR により、頭頂に連なる約 1800 ミリメートルの最長の神経 — 筋回路をいったん緊張させることにより、人を<2 分間>でリラックスさせることができる。このタイミングは、世界最短時間であり、機械等による自動化を進めれば、複数の人を並列処理出来る。治療ないしカウンセリンクは、その後に開始する。

<参考>三谷恵一・森昭胤訳 1988『リラックスの科学—毎日のストレスを効果的に解放する』講談社フルーバックス 715 14 刷 (McGuigan. F. J. 1981 Calm Down—A Guide for Stress and Tension Control、Prentice-Hall)



講話拝聴の後、会員各氏より質問が相次ぎ、予定時間を大幅に超過する盛況であった。この熱気は懇親会へ持っていくこととし、ひとまず総会を閉会。部屋を変えて懇親会に移行した。由比濱会長挨拶の後、各会員の自己紹介と近況報告を行い懇親を深めた。写真撮影の後、来年度の総会での再会を期して、19時30分閉会となった。

参加者は次の16名であった。

大坪 併治 岡山大名誉教授・島根大名誉教授 (昭10・国文)
南条 正明 岡山大名誉教授・岡山商大名誉教授 (昭14・心理)
石田 寛 広島大名誉教授・福山大特任教授 (昭17・地理)
服部 恒雄 服部物産合資会社社長 (昭22・西洋史)
由比浅省吾 岡山大名誉教授 (昭27・地理)
大羽 葵 岡山大名誉教授・近畿福祉大教授 (昭29・心理)
柳忠 正 岡山大講師 (昭33・英文)
山田茂昭 元山陽新聞社 (昭33・独文)
三谷恵一 岡山大文学部教授 (昭36・心理)
岡 勝繁 金光教本部教庁 (昭38M・宗教)
多屋 頼典 岡山大文学部教授 (昭42・心理)
河合 保生 和気閑谷高校教頭 (昭50・地理)
平岡 行雄 総社高校教諭 (昭51・仏文)
鷹家 秀史 岡山朝日高教諭 (昭55・米文)
石原 利博(旧姓 鎌尾) マルカトラベル(自営) (昭55・地理)
古川 義人 金光教本部教庁 (昭63・宗教)

◇ ◇ ◇

○逝去者

安藤 正瑛 (昭10・英文) 平成13年1月
竹内亥三美 (昭14・国文) 平成10年11月
○勤務先等の異動

山田 茂昭 (昭33・独文)
山陽新聞社退社 (平成13年2月)
川島炫三 (昭42M・哲学)
津山高専退職 (平成13年3月)
別府 信吾 (旧姓今井 昭41・国史)
倉敷市立誠思高校(校長) (平成13年4月)
河合 保生 (昭50・地理) 和気閑谷高校 (平成13年4月)
石原 利博 (昭55・地理)
マルカトラベル開業
深見みゆき (昭59・心理)
玉野高校 (平成13年4月)
熊代 一紀 (昭59・国史)
岡山後楽館高校 (平成13年4月)
古川 義人(昭63・宗教)
金光教北米センター(米国カリフォルニア州サクラメント市、平成13年7月10日から二年間) [河合保生記]

平成14年 [2002]

平成14年度総会は、4月6日(土)に津山市山下の「津山国際ホテル」にて開催された。支部総会を従来6月に開催していたが、二年に一度は岡山市から離れた場所を会場にしたいことや、かねてから津山で一度会を持ちたい意向もあり、ようやく実現できた。津山開催ともなれば、桜の開花にあわせようと異例の四月実施となった。今年は春の訪諏が観年より10日ほど早く、早々と満開となった「鶴山公園」の桜をめざして、11名の会員が津由城下の会場へ参集した。

11時に由比濱省吾会長(岡山大学名誉教授)の挨拶により開会。三谷恵一幹事より平成13年度の事業報告がなされた。今回の総会開催に至る経緯と会場準備等、地元在住

の柳 忠正氏の尽力により開会できたことが説明された。新規事業として今までのだよりを編纂して、『以文会活動の百年』（仮称）を二百部、来年の夏発行することが提案された。次に故安藤正瑛氏の遺影が本部名誉教授と同様に『以文』に掲載できなかったことや、多数の蔵書の存在が説明された。関連して岡山大学図書館は、蔵書数、受入冊数、雑誌種数、貸出数(学生)、図書館費などの指標で数値化すると、全国の国公立大学中下位に低落している情報が紹介された。最後にアメリカ合衆国滞在中の古川義人幹事からの、9月11日同時多発テロ発生時のアメリカの様子を伝えるEメールが披露された。

以上の報告に対して、図書館のポテンシャル低下が話題となり、岡山大学が大きく低下した理由の質問があった。研究室の蔵書利用度が指標に入っていないことや研究費重点配分のため雑誌種数が減少したこと等様々な考えが出されたが、いずれにしても改革が必要であるとの意見が大勢を占めた。その他の事業計画等はすべて了承された。

次に会計報告を行った。会計担当の竹部弘幹事の代理として河合保生幹事から会計報告がおこなわれた。また、今回は会員名簿の整理できていないため、出来次第別途送付する旨の説明があった。

続いて支部恒例となった講演会に入った。今回は京都橘女子大学文学部教授である狩野 久氏(昭 31・国史)から、「美作国の成立について」の題で講話をいただいた。要旨は次のとおり。

◇ ◇ ◇

「美作国の成立について」

狩野 久 (昭 31・国史、38D)

「美作国」は、続日本紀によれば和銅 6 年(712)4 月に「備前国」の六郡を割いて設置されたとある。この時には丹後国・大隅国も同様に設置されており、前年の和銅 5 年には出羽国が置かれている。この時期に律令国家の地方行政機構が完成したと捉えてよい。これにさきだつ持統 3 年(689)、飛鳥浄御原令で全国の大部分の国が成立している。大化改新の詔によれば、国の下の郡・里の編成方針が書いてあるが、国に関する記述はないからこれは信頼できない。

このことについて、飛鳥京跡第 131 次発掘調査出土木簡をもとに考察してみる。

この木簡の中には、出土した最下層から丁丑年と警かれているものがあり、それは天武 6 年(677)と考えられる。その上に、すなわちそれより新しい時代の木簡が層を成しているのであるが、その中に「无耶志国仲評中里布奈大贄一斗五升」の木簡がある。无耶志国」すなわち「むさし」という日本語を万葉がな風に漢字の音で表したもので、後の「武蔵国」の、「仲評」すなわち国の真ん中の評(こおり＝郡)の里から、布奈、つまり魚の鮒を大贄として一斗五升出したという意味である。

その他の木簡には、国名記載がなく評(郡)からいきなり書いてあるもの、さらに里から書いてあるものもある。これらの木簡は納税の際の付け札であるが、飛鳥時代にはまだ国・郡が納税の責任ある体制になっていないと思われる。奈良時代には国・郡・里・戸主の名前、税の種類、いつ出したか、についてまできちんと書かれるよう

になる。

次に、道と国境について。日本書紀によれば、天武 12 年(683)、13 年、14 年の 3 カ年にわたって大変注目すべき記事が出てくる。天武 12 年には伊勢王以下何人かの役人が、工人、技術者などを連れて、国々の境を決めさせる工事を行い、3 年かけて同 14 年によりやく国の境界確定の事業が完成したとある。これは画期的な事業で、それまでは地方を治めるのに国造のような各地のボスを通して支配していたわけであるが、それ以後は国司を都から派遣し統治することになり、これによって国郡里の制度が完成を見たのである。さらに戸籍の編成が可能となり、土地と結びついて入々を支配する方式が出来上がった。

次に、都と各地の国府を直結させる直線の官道について。山陽道の大市(現在の姫路市)から分離する美作道を作るのに時間がかかったものと思われる。このことが美作国の成立が遅れる原因と考えられる。よく吉備国は大国であったから、備前・備中・備後に分割し、最後に美作を分けて設置したといわれますが、そのような考えは時代感覚からして、いかななものかと思う。

また、美作は備前・備中とは文化・歴史の様子が違います。例として陶棺分布があげられる。陶棺は平成 4 年時点で全国に 678 例ある。そのうち、岡山県内に 75%、さらにその 70%が美作で出土している。陶棺は 6・7 世紀の埋葬の方法であるが、未だ解明ができていない。埋葬者はその地の豪族で、その中に鉄製品が含まれていることが多いので製鉄と関係がありそうに思われる。この謎が解ければ、美作国成立の経緯がはっきりすると考えている。

◇ ◇ ◇

講話拝聴の後、例年のとおり会員各氏より質問が相次ぎ、予定時間を大幅に超過することとなった。伊勢の王をはじめ、大和に岡山の地名があること、官道の幅、左側通行か否か、陶棺の出土、さらに馬について等々、話題は止めどなく拡大の様相を呈していった。話が尽きないので、続きは食事をしながらということで、一応講話を終了し懇親会へ移行した。

懇親会は由比濱会長挨拶で開会し、講話時の話が引き続き話題となり盛り上がりを見せた。宴たけなわではあったが、各会員の自己紹介と近況報告を行った後、懇親会を終了した。

この後、少し雲が厚くなりかけた中、急いで満開の津山城址へ登城。階段を利用して記念撮影を行い、天守閣跡まで登り、桜越しに見る津山盆地の景観を堪能する。

眼下には桜の海と津山かな 恵一

津山は古代美作国の中心地であり、近世は城下町として繁栄、近代も県北の雄都として発展してきた。高度経済成長期には産業構造の転換に遅れが生じたものの、県北最大の都市として今日に至っている。天守閣跡からは、津山市街地が北に向かって拡大していることや、市街地再開発の様子が確認できた。

ついに雨滴が落ちだしたため、城を後にして、内村鑑三に私淑した森本家によるキリスト教関係の資料が豊富な城下の「津山科学教育博物館」に向かう。さらに旧津山市役所を利用した「津山郷土博物館」へ入館。ここでは狩野氏から専門の古代史にか

かわることについて、展示物を見ながら説明を受ける。講話の理解を飛躍的に深めることが実感できた。今少し時間が欲しい状況であったが、帰路のことも考え、館の入り口で記念写真を撮影後、閉会宣言を行ったのは15時であった。

◇ ◇ ◇

参加者は次の11名であった。

石田 寛 広島大名譽教授・福山大客員教授 (昭17・地理)

服部恒雄 服部物産合資会社社長 (昭22・西洋史)

渡辺 荘 (昭23・哲学)

由比濱省吾 岡山大名誉教授 (昭27・地理)

狩野 久 京都橘女子大教授 (昭31・国史)

柳 忠正 岡山大講師 (昭33・英文)

三谷恵一 岡山大文学部教授 (昭36・心理)

川島炫三 (昭42M・哲学)

岡本不二明 岡山大文学部教授 (昭49・中文)

河合保生 和気閑谷高校教頭 (昭50・地理)

石原利博(旧姓 鎌尾) マルカトラベル (昭55・地理)

◇ ◇ ◇

○逝去者

鈴木文夫(昭8・倫理)

平成13年10月12日

○勤務先等の異動

新田一郎(昭34・西洋史)京都女子大文学部 (平成13年4月)

鷲見勝由(昭55 宗教)鳥城高校 (平成14年4月)

川端秀男(昭61 国文)岡山工業高校 (平成14年4月)

[河合保生記]

平成15年 [2003]

平成15年度総会は、7月5日(土)に岡山市内で開催された。本年は恒例となっていた会員による講演会を中止し、折から放映中であるNHK大河ドラマに連動した展覧会「武蔵 — 武人画家と剣豪の世界展 —」が岡山県立美術館で開催されていたため、第一部はその見学に当てることとした。第二部は会場を移し、総会・懇親会とした。梅雨空ではあるが幸い雨滴に煩わされることもなく、15時30分、県立美術館に9名が参集した。

◇ ◇ ◇

「武蔵—武人画家と剣豪の世界展」

岡山県立美術館ボランティア解説委員
祇園純子

見学の前に美術館ボランティア解説委員の祇園純子さんより展示の構成とポイントについて解説をいただいた。展覧会は第一章「武蔵 — 人と作品 —」、第二章「剣豪の世界」、第三章「武人画家の世界」、第四章「大衆のヒーロー」の四構成となっており、そのうち武蔵自身が手がけた書画や兵法書が展示される第一章が最も興味を引いた。その中でも期間展示である「^{こぼくめいげき}枯木鳴鶴図」は、振り上げられた太刀のような桔木の上部に一羽の鴟が静かに止まっており、その桔木の幹を尺取虫がゆっくりとはい上っている情景を描いている。解説委員から「やがて静寂を破る瞬間が到来することが予想される」との解説があった。これに対し三谷氏は、「重心がとれた構図で、むしろ緊張せずリラックスしているのではないか」と、氏の専門分野に基づく考えを披露

し、以文会らしい雰囲気がでてきた。

時間の関係もあるため急ぎ見学に移る。解説委員にはしばらく同行していただき、質問に答えていただくことをお願いした。期間限定である「桔木鳴鵬図」は、さすがに多くの入を集めている。幹にみられるのは尺取虫か否かの疑問は解決できないが、剣豪武蔵の入柄を現すものとの認識を持つことができた。

太刀を構えたような同様な構図は他にもいくつか見られ、鳥も燕、雀、翡翠が描かれている。いずれも緊張感のある画面構成である。しかし、その間に布袋様が描かれている作品もあり、リラックスを感じることでもある。見学時間に十分時間を当てる計画であったが、二百点を超える作品・資料のため、後半部分は一瞥するにとどまったのは残念であった。武蔵自身の作品は少数ではあるが、よくぞここまで関連作品を集めたものと感心した。

見学後、美術館正面で記念写真を撮影、ここで小橋国広氏と別れ、他の会員は総会会場へ移動した。

◇ ◇ ◇

総会は味司「野村」にて開催。総会から参加の岡本不二明・石原利博両氏と合流し、17時20分、由比濱支部長の挨拶で開会。三谷幹事から平成14年度の事業報告、河合幹事から会計報告がある。14年12月に開催された岡山京大会で、新しい会員が判明したことで今年は名簿作成をすることを報告する。支部の全体会計は竹部幹事の到着を待って行うこととし、懇親会に入る。昭和10年国文卒の大坪併治岡山大・島根大名誉教授の音頭で乾杯、歓談となる。

18時に竹部幹事到着、支部会計の報告が

あり、河合幹事の報告とあわせて承認を得る。女将から銘酒の差し入れもあり、和やかな雰囲気となったところで、会員からの近況報告をうける。93歳となられた大坪併治氏は、ご自身の経歴、同級生29人中6人が存命であること、先年京大を訪問した際学園祭で多くの屋台が目についたことに対し、旧制高校では屋台を出していたが大学ではしなかったこと、女性教官の増加に驚かされたことなど大先輩としての社会変貌の一面をコメントしていただいた。南条正明氏は関東大震災をはじめとする東京時代の思い出、石田寛氏は戦時中の予備士官学校や暗号解読に従事させられたこと、由比濱省吾氏はドイツの地理学者ラ・ツェルの著作の翻訳中であることなどが披露され、旧制大学出身の4名ともお元気で活躍であることがよくわかった。

続いて新制大学卒業の世代に入る。夫人同伴で出席の森定 齋氏は、昭和30年代の岡山以文会の話や信仰的立場で著作を執筆中であること、三谷恵一氏は3月に岡山大を定年退官し名誉教授となりオープンラボラトリーで研究中であること、岡本不二明氏は岡山大赴任前の鹿児島・高知時代の思い出、河合は母校への転勤、石原利博氏は旅行業界におけるSARSの影響、竹部 弘氏は国史から神学への移行についての思い出話や近況報告がなされた。話が尽きないうちに予定時間を大幅に超過してしまい、名残惜しい中、来年の再会を期して20時、閉会となった。

◇ ◇ ◇

参加者は次の11名。

大坪併治 岡山大名誉教授・島根大名誉教授
(昭10・国文)

南条正明 岡山大名誉教授・岡山商大名誉教授
(昭 14・心理)

石田 寛 広島大名誉教授・福山大客員教授
(昭 17・地理)

由比濱省吾 岡山大名誉教授 (昭 27・地理)

森定 齋 金光教総社教会長 (昭 34・宗教)

三谷恵一 岡山大名誉教授 (昭 36・心理)

岡本不二明 岡山大文学部教授 (昭 49・中文)

河合保生 岡山大安寺高等学校 (昭 50・地理)

小橋国広 岡山大安寺高等学校 (昭 51・国史)

石原 利博 (旧姓 鎌尾) マルカトラベル
(昭 55・地理)

竹部 弘 金光教教学研究所 (昭 57・国史)
他に、森定夫人の参加をいただいた。

◇ ◇ ◇

○勤務先等の異動

石川 寛 (昭 40・社会)

放送大学奈良学習センター

明石幸子 (昭 57・英文) 岡山朝日高

古川義人 (昭 63・宗教)

北米勤務から帰国、金光教本部
[河合保生記]

平成 16 年度 [2004]

平成 16 年度総会は、諸般の事情で 6 月中の開催ができなかったため、総会時に講話をお願いする予定の大坪併治氏と 9・11 テロ時に米国に滞在していた古川義人氏の随想で報告に代えさせていただく。

また、支部活動に多大のご功績があり平成 15 年 9 月に逝去された南條正明氏(岡山大学・岡山商科大学名誉教授)のご遺徳を紹介させていただく。

◇ ◇ ◇

○南條正明名誉教授のご逝去

平成 15 年 9 月 21 日、暗くなった自宅の近くの坂の有る曲がり角で転倒され、そのまま逝去された。享年 89 歳。葬儀は日本基督教団蕃山町教会で営まれた。

先生は、大正 2 年 11 月 26 日東京長老教会員医師 — 南條鉄次郎の次男として生まれ、7 年制の東京高校理科で南 博等と学び、京都帝国大学文学部で心理学を修め、同大学院を修了し、昭和 20 年に東大航空研究所(航空心理学)に入り終戦を迎えた。昭和 22 年小林富美と結婚、長崎県立短期大学教授として平島、五島列島など離島僻地を中心に地域に於ける人格形成を多変量解析により研究し、

①抽出された力・真・善・美・愛による価値体系

②社会的に形成された男らしさ・女らしさという第四次性度による変量曲線と変化曲線を説いた。

昭和 39 年から 54 年まで 15 年間岡山大学教養部心理学教授を務め、46 年には天野・南條・大羽教授、細田・三谷助教授の教・養・法文混成の五名で法文学部に大学院文学究科修士課程「心理学専攻」を創設した。

岡山商科大学名誉教授、日本社会心理学会名誉会員、元岡山心理学会長、勲三等旭日中綬章受賞(平成 5 年)。

[三谷恵一記]

◇ ◇ ◇

「尊敬の助動詞「る・らる」雑話」

岡山大名誉教授・島根大名誉教授
大坪 併治(旧姓 池田)(昭 10・国文)

一 岡山の方言には敬語が少ない。「れる・られる」だけで、「ます」を使用しない。岡

山の人同士は平氣らしいが、よそ者にはそうはゆかない。岡山に来て間もない頃、百閒川に釣りに出かけた。改修前の百閒川は、川幅は狭かったが、鯉・鮒がよくつれた。倉益から益野に通じる木橋の袂に陣取って、糸を垂れていると、突然「つれえかな」と話しかけられた。驚いて振り向くと、近所の人らしい男が立っていた。「つれる」は「釣る」の可能表現で、敬語抜きである。郷里の松江なら、「つれますか」と言うところ。古川柳にも「食いますか、などと文王そばへより」とある。文王は太公望のスカウトに成功したが、文王が若し岡山の人で「つれえかな」といったら、太公望はむっとして、スカウトは失敗に終わったであろう。

ところが、男は私の釣りを暫くみた後、「ようけ、つられえ」といって去っていった。「つられえ」は、「つられる」の命令形で、敬語表現である。岡山の文王も、最後は敬語で結んだのである。私にはこの古めかしく堅苦しい「つられえ」が珍しい方言として記憶に残った。

二 「れる・られる」の元の形は「る・らる」である。尊敬のほか受身・可能・自発などを表すが、尊敬の用法は奈良時代にはなく、和歌和文の世界では、平安中期になって表われ、可能・自発から派生したとするのが通説である。これに対して、私は、平安全期の訓点資料を調査し、多くの用例に基づいて、漢文訓読の世界では、尊敬の「る・らる」は、「見」を媒介として受身から派生したもので、その時期は平安極初期にあることを指摘した。例えば、次の諸例のように。

1 菩薩前至(り)て此の人の所に語(り)て言

(は)ク、「我今須ム草を。見よといふ恵(ま)レ少多。」吉安報(へ)て曰(は)ク、「甚善なり。不といひて為にはセ愛惜の。」即(ち)授(け)て草を与フ菩薩に。(石山寺本四分律平安初期点 三一)○「須」の左「モチ(み)ム」「恵」の左「与也」>会話 私ニ少シ恵ンデオクレ

2 善く来せるかな世尊、善く来せるか(な)善誓。(中略)唯(た)見て慈愍せ、処(たま)へ此の宮殿に。(石山寺本大方広仏華嚴經平安初期点 卷二) 会話 私ドモヲ憐レンデ下サッテ

3 毎作(さ)く是の念を、「我等も同(しく)入れるを法性に、云何ぞ如来の以(て)小乗の法を而見れてむ済度(せ)。」(竜光院本妙法蓮華經平安末期点 卷二) 心話、ナゼ私ドモヲ救ッテ下サッタノデアロウカ。次いで、辛島美絵氏の、「古文書の世界では、「被」を媒介として、受身から尊敬の用法が派生した」とする研究が発表されて、現在では、可能・自発説に代わって、受身説が優勢になった。

和歌・和文の世界では、「る・らる」の表す敬意は、敬語全体の中で、最も低いと言われている。敬意最低の「る・らる」を継承した「れる・られる」しか用いず、その「れる・られる」さえ省略することの多い「岡山方言」とは、不思議な存在である。岡山大名誉教授・島根大名誉教授(昭 10・国文)

◇ ◇ ◇

「平和を生み出すもの ― 宗教者への期待」

金光教本部勤務

古川 義人（昭 63 ・ 宗教）

9・11 に象徴される自爆テロが、現在もイラクで頻発している。私は、9・11 が引き起こされた当時、アメリカのカリフォルニア州の州都サクラメントに在住していた。サクラメントは州議会議事堂がある州の政治の中心であり、テロの対象となる可能性があり、危険であると判断され、午後から議会、学校など公立の諸施設が休止、休校となった。

事件当日、テレビで「これはテロではない。戦争だ」「第二の真珠湾だ」と報じられていた。当日、私は休校になる前の午前の英語クラスに出席したが、講師によってクラスの授業自体は急遽取り止められ、隣のクラスと一緒に、テレビの画面を見つめることとなった。その時の体験を紹介させていただく。

太平洋時間午前 8 時に始まるクラスに出席すると、五十代の白人女性教師が陰しい面持ちで「大変なことが起こったのを知っていますか」と教室内にあるテレビを点けた。その時にはすでに二機の旅客機はビルに体当たりした後であった。私達のクラスはその後一時間半の授業時間の間、隣の教室の学生と三十歳代と思しき黒人女性教師と一緒に、ずっとテレビの画面を見続けた。煙を上げるビルの映像を背にして、私達の担当教師である白人女性教師が真珠湾攻撃のことに言及し始めた。「真珠湾攻撃とはどういう事件か」と生徒達に質問し、ある生徒を当てて説明させた後、その講師の父親からの口伝として、攻撃当日のハワイの状

況とハワイにいた人々がいかに恐怖を感じたかについて生徒に語った。そして、9・11 のテロを真珠湾と結びつけて、こう語った。

「このテロは日本人による真珠湾攻撃以来のアメリカ国家、アメリカ人民への挑戦である。こうした卑劣な悪行を行う者たちから私達の家族、友人を守るために、私達は戦わなければならない。私達はこのテレビ画面に映る悲惨な状況から目を逸らさず、しっかり見つめて記憶に留め、後々の世代へ語り継がなければならない。」

また、もう一人の黒人女性講師は、歓喜して踊るアフガニスタンの女性や子供達の姿を画面に見ると、「信じられない」と言いながら首を横に振った。この時、私はこう思った。「この講師は大学の講師であり知性にも優れているはずである。しかも黒人として黒人が体験してきた深い悲しみを知っているはずである。そうであるはずなのに、なぜテロが行われなければならなかったのかという事件全体の文脈に思いを致そうと、黙って静かに画面を見つめようとしなかったか」と思われた。

クラスでただ一人の日本人であった私は、講師によって、真珠湾のことが卑劣な行為としてことさらに取り上げられ、居心地の悪さを覚えた。しかし、それにも増して、二人の講師の、それぞれの反応によって、私は非常に空しい思いに突き落とされた。「この二人の講師の反応はアメリカ市民の心情を代表するものだろう。そして、事件全体の文脈への視点は欠けたまま、事件が単純に善悪の二項対立に還元され、「善」なるアメリカが確信に満ちた冷酷さをもって広島・長崎を引き起こしたように、再び「善」なるアメリカによる「悪」への冷酷な反撃

の戦いが始まるのだろう。そして、真珠湾が語り続けられているように、9・11 もまたアメリカ市民によって、「善」なるアメリカが最終的に勝利する神話として語り続けられていくのであろう」と。

一方で、事件が発生した後、私はアメリカにある金光教の教会で奉仕を続けている教師から、この事態に宗教者としてどう対応するのか、聞く機会があった。宗教者としての対応は、事態を見つめつつ、厳粛に神に心を向けること、つまり、祈ることであった。その祈りの中では、四つのことが神に願われていた。一つに、煙立つビルに閉じ込められた人々の救出。二つに、救出された人々の命の助かり。三つに、亡くなった方々の家族や友人の心の助かり。四つに、亡くなった方々の慰霊ということであった。その後、具体的な行動として献金がなされた。信奉者個々の自発的な献金を教会単位でまとめ、さらに教団として一つにまとめて、後日、ニューヨーク市消防局へ献金された。その献金を持参するため、その教師がニューヨーク現地へ赴いた際に、彼は町中を一日中歩いた。そして、被害者の慰霊を神に願い、このような仕業を引き起こしてしまった過ちを神に詫びたという。神に詫びたその祈りの中身は、過ちを犯した犯人自身に成り代って神に詫びるというだけでなく、そのような仕業を起こさせてしまった責任は、他でもない、宗教者にあるのであって、それは自分自身にもあるのだという自責の念から、神に詫びたのであった。

罪を犯した人間を社会から抹殺あるいは断絶させて、社会を保全しようとするのは国家の仕事であらう。一方で、宗教者の仕

事は、罪を犯す人間を改心へと導き、その人間を人間として歩むべき道へと引き戻すことである。人ひとりが改心すれば、その結果、多くの人の命が救われることになる。人の命を殺めることを善とするようにテロリスト達を導いたのが宗教であるなら、その人達の改心を促すことのできるのも宗教であらう。

自爆テロを行い、外国人を誘拐し惨殺している人たちが、イスラムの神を正しく奉じていると自認している人たちであるのなら、そのように道を踏み外した人たちを生み出したのは、他でもない自分たち宗教指導者の責任であると、深く神に詫びる思いに突き動かされ、一刻も早くその人たちを改心へと導こうと、わが身を忘れて励もうとするイスラムの宗教指導者の登場を私は願う。

◇ ◇ ◇

○逝去者

南條 正明(昭 14・心理)

平成 15 年 9 月 21 日

藤井 學(昭 34D・国史)

平成 15 年 12 月 5 日

○勤務先等の異動

木下 鉄也(昭 49・中哲)総合地球環境学研究所教授

(平成 16 年 4 月)

岡田 憲朗(昭 51・国文) 西大寺高校

(平成 16 年 4 月)

[河合保生記]

平成 17 年 [2005]

平成 17 年度岡山支部総会は、6 月 25 日(土)に岡山市内のすし茶屋「銀八」にて開催された。昨年度この会が開催できなか

ったため、今年は会務報告の他に 3 人の方々から講話をいただく盛りだくさんの会となった。小部屋でなかったため総会会場としては不適當であったことは否めず、講話をいただいた方々には、大変申し訳ない事態となったことをお詫びする次第です。

ともあれ予定の 17 時に由比濱省吾支部会長（岡山大学名誉教授）の挨拶で開会した。はじめに三谷幹事から京都大学で 4 月 29 日に行われた「以文会」創立 50 周年記念大会の状況並びに岡山支部の歴史などについて報告がある。出席者がほぼ揃ったのを機に、支部恒例となった講演会に入った。今回は津山工業高等専門学校名誉教授である川島炫三氏（昭 42M・哲学）から、「田邊 元先生の晩年とその後」の題で講話をいただいた。要旨は次のとおり。



「田邊 元先生の晩年とその後」

川島 炫三（昭 42M・哲学）

定年後の人生を晩年と考えれば、田邊先生は 1945（昭 20）年の三月には、京都帝国大学文学部を定年になり、7 月には北軽井沢の大学村に転居し、その後殆ど下界に降りてこれなかったと言われているので、北軽井沢の生活は正にその晩年そのものであった。しかも実に坦々として、実り豊かな晩年であった。

定年退官の時の公開講座では、「懺悔道」（Metanoetik）の理念に到達し、敗戦の決定的な状況の中で、国家の指導的な立場にありながら、戦争突入を阻止することの出来なかったこと、教え子を戦地に送らざるを得なかったことに対する万感の想いがその底辺にあるとはいえ、「懺悔道」の理念は

それだけではない。認識論（Noetik）を越えてその背後にある前提に共通する条件が存在しなければ、認識の根拠を如何に探究しても、そこには無限の議論が可能であって、共通にして普遍的な価値への主体的な意志が生まれることはない。共通にして普遍的な価値への主体的な意志が欠如しているところでは、如何に多くの議論を積み重ねても、結局暴力に頼る戦争でしか決着をつけられないことが、歴然としてしまったことへの痛烈な反省でもあった。

暴力に頼る戦争を避けることが第一義的に前提されるとすれば、この反省は、一人田邊先生だけが考えれば良いものではなく、日本人全部が、否、世界中のすべての人々が、考えなければならない事柄であった筈である。敗戦後の一億総懺悔の掛け声は、田邊先生の「懺悔道」に呼応するかのようになり、為政者によって都合よく利用されたとも考えられる。しかしその底の浅さは、田邊先生の理念に遠く及びもつかず、戦後の軽薄な物質文明の氾濫によって、その「懺悔道」の厳しさに気付きもせず、その言葉さえも忘れ去られようとしている。

昭和 25 年に文化勲章を受賞した時も、下界には降りて来なかった。夏の北軽は涼しくて仕事も捗るけれども、冬の北軽は寒さ厳しく、零下 20 度近くにもなることがあるとのこと。元気な内は、それでも堪えられるかも知れない。病気がちの奥様との生活は、お手伝いの方が居られたとはいえ、何かと大変であったであろう。弟子たちはもっと暖かい所に転居することを勧めたりもした。弟子たちにとってはその方が好都合なのであった。不便な山の中にわざわざ行かなくとも、伊豆近辺の暖かいところに居

られたら、その方がずっと有り難い。しかし田邊先生は頑として動こうとはされなかった。自分は死んだ人間なのだから、そのために弟子たちから見放されるのであれば、それもまた人生と考えられて居られたのであろう。

しかし真剣な学究の徒が尋ねて来られると、我を忘れて議論に熱中されたとのこと。弟子たちの訪問が田邊先生の北軽での研究を根本的に支えていたと言っても過言ではないであろう。『哲学入門』での四回にわたる集中講義、奥様ご逝去後の「北軽井沢特別講義」「続北軽井沢特別講義」などは、田邊先生の哲学研究への意欲を駆り立てた弟子たちの並々ならぬ配慮の賜物と考えられる。常にその尖端に輝く光を求めて、格闘している田邊先生の姿は、弁証法的にその前の段階を踏み越えることによって、また新しい問題への挑戦になっていった。

西田先生との出会いに始まり、自然科学や数理哲学研究を経て、カントの認識論、フッサールの現象学、ハイデggerとの出会い、西田先生からの自立、ヘーゲル哲学への傾斜を通じて、存在の論理としての弁証法を中心にして、類と種と個の原理から、新しい論理としての「種の論理」を展開し、国家の在り方を確定しようとした。しかし、現実の国家は太平洋戦争に突入してしまったために、国内的な分裂行動を避け、論文発表をせず、公的な発言を控え、4年間程、論文は一つも発表せず、全くの沈黙を守った。敗戦が決定的となった最後の年の特殊講義の題目は「懺悔道」であった。

そして、敗戦と同時に、堰を切ったかのように次々と論文を発表した。『政治哲学の急務』、『懺悔道としての哲学』、『種の論理

の弁証法』を纏め、戦後の日本の向かうべき方向を打ち出した。それと共に、西洋文明の真髄を表わす『キリスト教の辯証』を出版した。これは正に目覚ましい活躍であった。しかし田邊先生の思想は極めて難解であったためか、文化勲章の受章にも拘らず、一般的には十分な理解が届かず、かなり誤解されていた面も多かったように思われる。

一般的な理解はされなくとも、学問としての原理はしっかりと確立しておくことが田邊先生の使命でもある、と自覚されておられたのもあろう。それが学問体系の入口としての『哲学入門』の講義であった。それは『田邊元全集』第十一巻の六百ページを越える膨大なものであり、学問と名づけられるあらゆる領域を原理的に包含するものであると言ってもよいであろう。学問の入口が確定されたら、次はその原理による具体的な展開であった。それが数学と物理学の領域に踏み込んだ『数理の歴史主義展開』と『理論物理学新方法論提説』と『相対性論の弁証法』である。田邊先生は、数学や物理学に関しては素人であることを自覚しながら、何か抑え難い情熱を感じていたように思われる。そして文学及び詩の領域では、『マラルメ覚書』を纏め、学問を越えた存在の真実としての人間の姿を描き切ろうとしている。田邊先生の友人としてのハイデggerは数学や物理学にはあまり踏み込んだ発言をしていなかったように思われるが、哲学が詩化されることにかかなりの違和感を抱いていたようである。そして人生の最後の課題は、学問としての哲学、人生としての詩、存在としての宗教をどのようにして統合するかであった。それは未完

に終わったが、「哲学と詩と宗教」として死の直前まで格闘されていた。

ハイデッガーの推薦により、西独フライブルク大学創立五百年祭に際して、同大学名誉博士号を授与されたことにより、ハイデッガー七十歳記念論文集に、「Todes-dialektik」を寄稿することになった。これは「生の存在学か死の弁証法か」という表題の下に、田邊先生の死後、『哲学研究』(483号)に掲載された。この境地は「死の哲学」とか、「実存協同」とか、「聖者の交わり」とか言われ、ハイデッガーの哲学との相違が強調されることになる。

ヘーゲルの弁証法の研究(第二章)後、田邊先生は常に弁証法を強記し、同一律と矛盾律を原理とする同一性論理と対置し、同一性論理ではどうしても二律背反に陥るが故に、カントの弁証論からヘーゲルの弁証法に発展・展開されなければ、真の存在の論理にはなり得ないと言う。西田先生やハイデッガーに対しても、田邊先生は常にその観点から批判をしていく。勿論同一性論理が無用であるわけではなく、ただそこにこだわり続けることは存在の具体的な論理を見失うことを強調していると考えられる。

絶対弁証法とか、種の論理とか、懺悔道とか、位相学とか、歴史主義とか、すべてこの同一性論理との対比から生まれて来る。瞬間瞬間の真実は、次の瞬間には、反対の意味を含み得ることになる。その緊張関係の中での行為に誠の真実が生起して来る。それは絶対の無において、自己の行為が行信証せられる。

◇ ◇ ◇

続いて大坪併治氏(岡山大・島根大名誉

教授 昭10・国文)氏の乾杯で懇親会に移る。懇談のはじめに大坪氏から昨年講話をいただく予定であった「尊敬の助動詞『る・らる』雑話」について概要の解説がなされた(要旨は以文四七号岡山支部欄に掲載)。

次に由比濱氏より『『以文会 岡山支部』の活動 百～五十年』の題で講話があった。主に昭和30年頃の岡山支部の活動状況とその後について、本部から提供いただいた京大以文會會報第一号に記載されている支部役員の内藤雋輔(岡山地区評議員)、内田律爾、能仁事教、木畑貞清、藤井駿、江實の各氏について紹介があった。岡大関係者以外は、当時の勤務先などよくわからないままであったが、出席者のなかに図らずも関係者がいたため、絡まった糸が解れ、いずれの方々も人物像が明らかになる成果が得られた。当初の会の活動については、岡山大関係者の集会的色彩が強かったようである。その後、大学紛争時に大きな混乱があり、資料も失われてしまい、幹事に指名された由比濱氏は、支部再興にあたり名簿づくりから始めなければならず、会を広く大学関係以外にも広げる必要性に鑑み、会員の有無を何度も関係機関に問い合わせる等の苦労話が紹介された。由比濱氏の尽力があつて、はじめて現在の岡山支部の活動が成り立っていることに参加者一同敬服の念を抱いた。

川島氏の講話や大坪氏、由比濱氏の話題をもとに会員相互で懇談が盛り上がっている時ではあつたが、一時的に総会モードに切り替えていただき会計等の審議をしていただいた。最初に古川幹事から会計報告があり、問題なく承認された。次ぎに河合幹事から支部会員の状況について、2005年版

以文会名簿から新たな会員の判明があり
115 名となっている旨の報告がなされた。

最後に出席者から近況報告があり、来年
の再開を期して 19 時 40 分に閉会となった。

参加者は次の十三名。

大坪併治 岡山大名誉教授・島根大名誉教
授 (昭 10・国文)

石田 寛 広島大名誉教授・福山大客員教
授 (昭 17・地理)

由比濱省吾 岡山大名誉教授 (昭 27・地理)

柳 忠正 元津山高専教授 (昭 33・英文)

三谷恵一 岡山大名誉教授 (昭 36・心理)

川島炫三 津山高専名誉教授
(昭 42M・哲学)

多屋頼典 岡山大文学部 (昭 42・心理)

岡本不二明 岡山大文学部 (昭 49・中文)

河合保生 ノートルダム清心女子大文学部
(昭 50・地
理)

平岡行雄 岡山東商業高校 (昭 51・仏文)

古川義人 金光教本部教庁 (昭 63・宗教)

太田雅志 NHK岡山放送局 (平 13・国文)

真壁靖史 放送大学 (平 15・西洋古典)

◇ ◇ ◇

最近の会員動静

○逝去者

河手龍海 (昭 24・国史)

平成 15 年 8 月 31 日

小橋 新 (昭 23・西洋史)

平成 15 年 10 月 10 日

郷司泰造 (昭 25・哲学)

平成 16 年 10 月 8 日

大谷栄之助 (昭 12・東洋史)

平成 17 年 1 月

[河合保生記]

写真 1 川島氏 (右端) による講話

平成 18 年 [2006]

平成 18 年度岡山支部総会は、7 月 8 日
(土) に赤磐市殿谷「熊山英国庭園」にて
開催された。今年度は岡山市を離れ、地元
にご在住の石田寛氏から講話をいただくと
ともに旧熊山町文化財の見学を行うとい
う充実した会となった。会場の「熊山英国
庭園」は廃校となった小学校跡地を利用し
たもので、岡山市の郊外化進行地域とはい
え農村景観が広がる地域にあって大変ユニ
ークな存在となっている。

11 時に由比濱省吾支部会長 (岡山大学名
誉教授) の挨拶で開会し、支部恒例の講演
会に入った。今回は広島大学名誉教授・福
山大学客員教授である石田寛氏 (昭 17 年・
地理) から、「中岡慎太郎・坂本龍馬と津田
弘道との会談」の題で講話をいただいた。
要旨は次のとおり。

◇ ◇ ◇

「中岡慎太郎・坂本龍馬と津田弘道との会談」

広島大学名誉教授・福山大学客員教授

石田寛氏 (昭 17 年・地理)

もっとも興味を引くものは、中岡慎太
郎・坂本龍馬の二度にわたる会見である。
津田は水戸藩天狗党の情報蒐集後引続き京
都へいた。津田個人の記録、岡山藩の記録
に中岡・坂本との会見に関することは見当
たらないが、中岡慎太郎の『海西雜記』に

その会見の記録がある。第一回目は京都、第二回は岡山城下の近くの藤井駅と二度会ったことが知られる。経緯をもっと詳しく見よう。

1 中岡慎太郎・坂本龍馬と津田弘道会談

中岡慎太郎は、元治二年（慶応元年）二月五日赤間出発、七日馬関に至り、十三日に上京、藩邸に投じ、上国の形勢を視察し、廿三日再び西下する。この京都滞在十日間の一日（慶応元年二月十七日）水戸の河邊春次郎、備前の津田彦左衛門、河邊源太夫に会っている。中岡慎太郎の『海西雑記』元治二（一八六五）年二月十七日の項に、晴、吉井より猪肉一足を送る。直に焼て下物に当つ。午後松田江行く。会候決心東下に付、段々議論ありし由、（中略・・・）○尾州老公狂を被レ 病候云々。○姫路廿余人斬る。楽候大老
水戸 河邊春次郎
備前 津田彦左衛門、河邊源太夫
六百年來の廃典を被レ 興、近衛公府公大和に御越、今朝御発駕。

猪肉が送られたのを機に、中岡慎太郎・坂本龍馬が催けた一席に招かれたのが、水戸の河邊春次郎、備前の津田彦左衛門（弘道）、河邊源太夫の三人であることから河邊春次郎の肝煎りで備前の津田らが招かれたとみられる。

初会は坂本らと津田らの招宴である。第二回目は坂本らの備前訪問であり、城下の東北方藤井宿に津田らが迎える。

慶応元年二月廿六日中岡は汽船に搭乗して兵庫を出帆、三月三日博多着、直ちに太宰府に至ってその見聞を三條實美に報告、

薩長和解提携のために奔走する。閏五月二十九日、坂本龍馬を伴って三度目の上京の途に登る。『海西雑記』によれば、「閏五月二十九日夜発舟、六月朔日（記事なし）。同慶応元年六月十日備前西大寺に宿す。同十五日、藤井駅に宿す。周旋客津田彦左衛門、伊木太夫臣小松源治面会」とあって、六月十五日津田らとの面談を以て日記を終っている。この面談についても今のところ史料が見付からない。

2 会見についての今までの意味づけ

尾崎卓爾（大正一五年）は、「中岡と坂本は、六月十二日太宰府を出發したが、折柄天候が陰悪であったため、十四日兩人は備前西大寺駅に上陸し、十五日藤井駅へ行くと、例によって中岡は、芸州藩や因備方面の模様を探察し、是非とも芸州を説いて、長州の味方をさせねばならぬということで一泊した。そして中岡は人を使ひて、旅宿に津田彦左衛門、小松源治の來訪を求め、征長問題に関する件を確かめたうえ、直ちに西郷を追うて、京都に入つたのは六月二十四日であつた」と、風待ちのため立寄つたついでに、一般情報と芸州説得依頼というように、津田らへの面談にあまり大きな意義を認めようとしていない。

ところが小野金次郎（昭和一八年）は、「せつかくの薩長連合もこのままに終るかにみえたが、慎太郎と龍馬の血みどろな活躍が続く・・・十五日には藤井へ行く。そこで津田彦左衛門、伊木太夫臣小松源治らに會つて芸州藩を味方にひき入れるために説いた」として、中岡・坂本の津田らへの面談、津田への期待を評価している。

この二人は京都における坂本・中岡の津

田ら招宴のこととは無関係に述べている。近藤定常・伊木三猿齋の龍馬匿いの件との関連的考察も行っていない。

3 家老伊木関係史料の再検討

伊木三猿齋の懐刀といわれた近藤定常の記録も検討することが、この際決め手になる。筆者は、京都で招宴の席を設けられていたことから考えて、中岡・坂本の津田との面談の意義を積極的に評価したい。その手掛りは、①既に京都で会っている。手掛り②は、次に『近藤定常履歴書』を中心に述べるごとく、岡山藩が長州再征の成行運命を左右する立場におかれ他藩士、浪士の来往はげしく、津田は応接するとともに、探索・周旋に広島など他藩へ出向くという状況であったことである。探索活動の一端が『風聞書』として残っている。

坂本龍馬・中岡慎太郎兩人、ことに坂本龍馬は、維新史の「悲劇の主人公」ナンバーワンである。ありあまる才能をもち縦横に奔走しながら、維新の偉業成就直前に三三才の若さで白切に倒れたがゆえに、万人に一層敬慕されている。坂本の縦横の機略、精力的活躍は、各方面から発掘、研究されているが、岡山藩とのかかわりについては未だほとんど知られていないようである。史料の示す限り、前記『海西雜記』にみえるところの津田彦左衛門や、河邊源太夫訪問が初見であり、備前との最初の係り合いである。『近藤定常履歴』(池田家文庫)に、慶応元、二、三年第二次征長前後、岡山に諸国藩浪士が頻繁に連絡をとり来る。そのなかの一人に坂本龍馬の名前がある。

慶応元年正月、長州正義派の台頭とともに、その密使やこれに共鳴する他国浪士が、

広島や岡山に工作に訪れる。後述するごとく、長州の密使などを津田は数回応接している。

幕府長州再征が発せられる(慶応元年五月一六日)と、反対が多く、備前、因州、芸州、阿波、筑前などの雄藩はその最たるものであった。一方幕府は「備前は最もその要路に居ると以て数々の厳令を下し、出兵を促し岡山城下を以て大將軍の陣營に充て」ようとしたので物情騒然となる。この時、あるいは伊木長門に建白し、あるいは書を近藤定常に送り、あるいは来藩した者に次の面々がある。

松田小三郎、河田佐久間、河田精之丞、土肥謙蔵、笹木政吉、安達清風、鯉沼伊織水戸ノ浪士、始要人後香川桂三ト称ス、又敬三トモ云、武藤小四郎、西野昇三、村上順蔵、新館精一郎、坂本龍馬、大木土佐肥後藩家老ノ嫡男、長岡良之助護美、平山勇五郎、清水健次郎例臣ト云筑後藩士、柴原順治、竹鼻陶次豫州小松藩士、桜間貞之介淡州ノ士、二見一鷗斎、里見次郎、西要次郎周ト云フ、石川清之助、島田方軒恭雄、高木義之介、八木良蔵土佐ノ士、後北垣周造又国道、米田虎之助容保、城井晋太郎

これらの面々をみるに、当然のことながら『一家春秋』にでてくる人々や各地で岡山藩周旋局と密接に関連しているので興味深い。

さて再び近藤定常の記述をみよう。長州再征軍岡山通過に当って、「藩界を固くし以て幕命に相反対す。依て幕吏大に嫌疑を抱き大將軍の岡山を過ぎて馬を西に征することを躊躇す。是を以て諸藩の兵左右を顧み敢て進まず。長州再征を遂に果さず。毛利家これを喜び、藩公及び伊木長門の忠志

厚きを知り、内使往来し奇兵隊士のうち数輩密に岡山に來り、長門に倚頼し假りに伊木家の從と為り或は各藩の有志輩來る者多し。實に枚挙するに遑あらずと雖も其大畧を掲げれば即ち河田佐久馬、全精之丞、坂本龍馬、石川清之介、八木良藏、笹木政吉、鯉沼伊織、二見一鷗斎、里見次郎等数士なり。幕吏これに注目す」とある。定常また顧慮する所ありて・・・隠匿せしむ。皆潜伏して時の來るを俟つ。戊辰前京都に出て一死以て國に報ぜんとす。戊辰の事起るや皇軍に走り機に投して奥羽に赴き、数々戦功を立て擢用せられ官職を奉ずる者甚だ多し」と記している。

慶応三年六日の記述に「六月前に隠匿する有志土佐藩士坂本龍馬、勢州の浪士二見一鷗斎は薩長肥に、紀州の士里見次郎は京都に赴かんと乞う。定常また廣田村之介の前轍をにみ抑留す。龍馬曰く顧慮する忽れ路を海に攪て窃に行く。足下何を心頭に掛る事これあらん。然れども僕甚恥ず囊中相空し、願くは渡行資せんことを乞うと則ち金六拾兩を三士に投ず。而して往く。遂に次郎は大和に於て暗殺され、龍馬は長藩士中岡慎太郎と共に京都に客す。十一月十六日探吏兩士を問うて來る者あり。龍馬の僕藤吉出て其氏名を問うと雖も黙して答えず。僕甚だ訝り階上に登り兩士に告げんとす。曲者亦窃に跡を逐て階に登り一劔先ず僕を屠り、進んで兩士を殪して去る。彼は則ち幕府の新撰組長近藤勇・土方歳三の二名なり」（『近藤定吉履歴』）

右の記述には坂本龍馬・二見一鷗斎・里次郎らを一時かくまい、出立に際して大金六拾兩を持たせてた。次郎は大和で暗殺される。そして龍馬と慎太郎は新撰組の僅に

たおされたとしるしている。涙なしでは読めない。

この記録によると、京都と中岡慎太郎、岡山藤井の宿で龍馬・慎太郎と津田弘道・小松源治（伊木の家臣）と会う。『海西日記』の記述はそれまでであるが、坂本龍馬と家老伊木三猿齋の關係はさらに展開していったことが知られる。

写真 1 川島氏（右端）による講話

平成 19 年 [2007]

平成 19 年度岡山支部総会は、6 月 23 日（土）に倉敷市の「倉敷国際ホテル」にて開催された。今年度は湯浅和夫氏（元ユアサ商事株式会社）から御尊父で岡山支部会員でもあった京大名誉教授湯浅幸孫先生と祖父にあたられる元三高教授湯浅廉孫先生の二代にわたる明・清の貴重な蔵書についての講話をいただいた。また、京大大学院文学研究科教授の池田秀三先生にも、これらの蔵書の調査結果について御講話をいただく予定であったが、日程の都合で叶わず、ここに掲載させていただくに至った次第である。

会の方はいつものように 11 時に由比濱省吾支部会長（岡山大学名誉教授）の挨拶で開会し、事業報告・会計報告が幹事団より説明され、いずれも疑義なく承認された。特に会誌「以文」の第一号から B5 判化される以前の四三号まで製本したものが披露され注目を集めた。これは三谷幹事から支部に寄贈された冊子をもとに、欠号分は本部事務局のご協力を得て複製し、完本にしたもので資料的にも価値が高いものと評価

された。

【写真 1】

続いて支部恒例の講演会に入った。湯浅氏の講話の要旨及び池田秀三氏の寄稿文は次のとおり。



「京大名誉教授湯浅幸孫及び元三高教授 湯浅廉孫の明・清の蔵書について」

湯浅 和夫

この度京都大学以文会岡山支部三谷恵一幹事様から「京大名誉教授湯浅幸孫(中国哲学)、旧制三高教授湯浅廉孫明清蔵書」について講話の御依頼がありましたが、学問的裏づけもない素人の私が以文会の皆様方の前でお話しするのは誠におこがましく失礼にあたりますので、私が知り得た祖父・父についてお話ししたいと思います。

私が生まれた時には既に祖父廉孫は他界しており、祖父のことは神戸在住でいまだ健在の伯母から聞いた話とか出版物から知り得たことが大半で記憶も鈍く、間違ったこともあるかもしれないがお許しを頂きたい。

祖父は岡山県上道郡富山村宇海吉の生まれで、中学生の時、知事に建白書を提出して上京、二松学舎を卒業後、第一高等学校へ入学、夏目金之助先生が松山から赴任されたので一高を退学して五高に移る。杜甫の「乞食」の詩が縁で夏目家の居候となり、その後門下生として終生ご迷惑をお掛けする事となる。そのころ祖父は漢文に対しては優れた才能があったようだが、五高卒業

の時ドイツ語で及第如何と職員会議で問題となった折、夏目先生が、「湯浅は漢文で立つ人間でありドイツ語は関係ない」と言われ、卒業出来たとのことである。

漱石全集「書簡集」を読む時、度重なる先生のご厚情と弟子を思うお気持ちがうれしく、幸せな祖父であったとつくづく有難く思う。明治 37 年東京帝国大学を卒業、夏目先生のお口添えで皇學館大學に就職、その後広島高師から、大正 12 年三高に転勤した。

祖父は大正 14 年文部省より上海北京漢口へ視察を命ぜられ、その年同時期に兄武孫(三共重役)はドイツへ、従兄の竹内牧人(海軍少佐)はイギリスに出張することになった。大正 15 年東京の愛宕山放送局から中国視察の状況を放送する事になり、東京帝国大学での講演を兼ねて上京する。大正末期から昭和の初期にかけては、京都放送局でラジオ講座の漢文を担当した。昭和 5 年には三高史上重大な事件、森校長排斥のストライキがあり、学生 8 名が退学処分となる。その夜吉田の祖父宅で学生 8 名が男泣きしたと聞く。学生側についた祖父は森校長とともに退官した。官を辞し時、私学からの強い要請で、龍谷、大谷、京都女専の講師として勤めることになる。

晩年は脳溢血の後遺症残る中、長年研究してきた事を七年かけて原稿にまとめ「初学漢文解釈二於ケル連文ノ利用」との題名で出版社に依頼したが、校正することもなく昭和 16 年 69 歳で生涯を終えた。

父幸孫は大正 6 年岡山生まれで、昭和のはじめ京都に移り、府立一中から七高へと進み、昭和 16 年京都帝国大学哲学科へ入学する。父は七高生の時にはジャーナリスト

を志望していたが、祖父の死後同じ道を歩むことを決意したと聞く。山口大学を経て、昭和 32 年家族を岡山に残して京都大学に移り、定年退官するまでお世話になる。退官後、一時期私学に勤めるが、その後も研究の意欲は終生衰えることもなく、平成 15 年 2 月 86 歳で生涯を終えた。現在大学を取り囲む環境は非常に厳しく、実用と効率ばかり重んじられるなかで、祖父廉孫・父幸孫は一生漢籍にかじりつき、古きよき時代の教育者として自分の意のままに行動できた人生はすばらしいことであり、満足であったことと思う。

中国思想史研究は、祖父から父に継承された家学であり、明治・大正・昭和に亘り収集された唐本の中には多数の貴重本も含まれており、将来散在することなく一括管理し、後世の研究者の為に役立つ方法を現在模索しております。

蔵書については、京都大学池田秀三先生並びに宇佐美文理先生に調査をお願いし、お忙しいなか三年を費やして、仮目録を年内に作成して頂けることになりました。両先生方には廉孫・幸孫の分身とも言える蔵書に真摯に取り組んで頂き、誠に感謝に耐えないです。

末筆ながら、皆様方のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

(元ユアサ商事株式会社勤務)

【写真 2】



「湯浅廉孫・幸孫二代の蔵書」

京都大学大学院文学研究科教授

池田 秀三

湯浅幸孫先生(1917—2003)が逝去されてから、早四年有余の歳月が過ぎ去った。まさに墓前宿草の感に堪えない。ご逝去当時、残された我々授業生の最大の無念はついに先生の「清朝学術史」を眼にすることができなかったことであつたが、もうひとつ全員の気掛かりであつたのは、先生の蔵書の行く末であつた。ご父君廉孫先生(1875—1941)以来、二代にわたって集められた漢籍が、個人の蔵書としては質量ともに日本有数のものであること、いや、公蔵のものを含めてもこれだけのものは滅多にないことは、中国古典研究に携わる者ならみな知っていることであり、それが散逸しないかと危惧していたのである。とはいえ、その書物はあくまで湯浅家の所有物であり、その取り扱いのご遺族のお考えにまかせるしかない。我々の口出しすべきことではないと考え、ただ、ご葬儀の折、ご遺族に対し、もしご蔵書のことで相談の必要があれば、ご用命下さいとだけ申し上げておいた。

ご蔵書のことは、その後も私の念頭を離れなかったが、2004 年の夏頃、思いがけずご令息の湯浅和夫氏からご連絡があり、ようやく事後の整理がついたので、父の遺言に従い、蔵書を京都大学文学部に寄贈したい、とのお申し出をいただいた。まことにありがたいお話であり、お受けするとお答えしたい思いは万々であつたが、残念ながら、文学部図書室の収蔵量はすでに満杯に近く、先生の蔵書を受け入れる余裕のない

ことは明らかであったので、涙を呑んでお断りをするしかなかった。和夫氏は、スペースのある分だけ選択して取ってくださって結構ですと、さらなる厚意を表してくださり、こちらとしてもそうしたい思いはやまやまであったのだが、それは折角の蔵書を分散させることとなるので、そのご提案もやはり受け入れることはできなかった。※蔵書を一括保存すること、それが最優先課題であった。先生は文学部の収蔵が物理的に不可能であることを予期しておられ、もし京大が無理なら、岡山大にと言っておられたとのことであった。私としては、もし岡山大が受け入れてくださるなら、それに越したことはないと感じたが、どこが受け入れてくれるにしても、ご蔵書の整理とおおよその状況の把握をまずしておかねばならないことは明らかであった。前述のごとく、ご蔵書が屈指のものであるとの世評は高かったが、その具体的内容は、私を含めて、ほとんど知られてはいなかったからである。かくして、私の岡山通いが始まった。

整理を始めてみてすぐに、これは予想以上の難事業であると感じた。先生ご自慢の秘蔵書のあれこれは、学生のとき、伏見下板橋のお宅で二度ほど見せていただいたことがあったが、それは蔵書のごく一部にすぎない。また岡山のお宅を訪ねた際にも見せていただいたのだが、それは表座敷に出ていた分だけであった。書庫の中にはなお大量の書籍が隠されていた。しかも書籍の配列が必ずしも規則的ではなく、あちこちに分散されている状態であった。私ひとりではいつまでかかるか知れぬので、宇佐美文理助教授（湯淺先生最晩年の学生）にも

同道願うこととした。ただ、大学での雑務は益々繁忙を極め、時間的制約から一泊二日の調査・整理を年に三回程度しか行えず、ことはなかなか進展を見なかった。和夫氏には心のこもったご接待を受けながら、ご迷惑をおかけして申し訳なく思っていたが、先般唐本漢籍についてだけはようやくあらましの調査を終えることができたので、ここにその概要をご報告しておきたい。

まず全体的なことについて述べておくと、書物の保存状態は全般的にすこぶる良好である。ただ、原帙が失われているものが少なくないことは惜しまれる。両先生の訓点や校記の附されたものも多く、死蔵ではなく、研究に活用されていたことがうかがえる。

蔵書の漢籍の大半は唐本（中国で刊行された書物）で、和刻本はそれほど多くはない（と言っても、唐本に比べて相対的に少ないということであって、絶対量としては100点に近い。また質的にも、稀覯本とは言えないものの、津藩有造館本『資治通鑑』や官版といった善本が含まれており、かつ全般的に刷りのよいものが多い。なお準漢籍も同程度ある。まだ調査しきれていないが、おおむね通行本である。ただ稿本や鈔本には見るべきものがあり、中でも伊藤馨『晏子春秋證注』の稿本は出色である。）

唐本のほとんどは清から民国初期にかけての刊本で、活字本は朝鮮版を含めてもわずかである。取り立てての善本は少ないが、張九成『横浦文集』の万暦本をはじめとして四部、その他にも明刊と覚しき本が数種存在する。点数は確認を終えたもので約九五〇種、冊数は優に万に及ぶ。さらに刊本に加えて石印本・景印本・排印本が合わせて

100 点ほどあり、現在なお調査中である。注目すべきは、稿本・鈔本が十数点あり、しかも珍品揃いであることである。楊梧『禮記說義纂訂』は刊本もあまり流通していないが（東大東洋文化研究所には一本を備えるが、京大では文学部・人文研とも所蔵しない）、その鈔本となると、他に所在を聞かない。また『語石』の稿本はまことに美本で、清書原稿ではないかと思われる。『曹月川集』など鈔本の一部は廉孫夫人が鈔写されたと先生よりうかがったことがあるが、字体よりみて、大半は刊本と同様、購入されたもののようである。王紹蘭の旧蔵本（『尚書後案』）もあり、旧蔵者が誰で、またどのようなルートで入手されたのかについても興味は尽きないが、彙文堂あたりから購入されたのであろうとは想像されるものの、残念ながら、一部を除いて詳細は不明である。また唐本のほとんどに「觀生廬」の蔵書印が捺されており、ほぼ全て廉孫先生が集められたものであることが知られるので、民国初期の刊行物は彼地に直接発注されていたのかもしれない。なお、先生作成の蔵書目録はないかと探してみたのだが、一部の書籍の購入目録のごときものはあったが、全体にわたるもの見つけられなかった。

以上に述べたのは綫装本についてであるが、それ以外に大量の洋装本も残されている。これはほとんどが幸孫先生の購入に係るが、あまりに量が多いのと、またその多くが今でも新本あるいは古本として入手可能であり、貴重さという点では綫装本に一籌を輸するので、調査は後回しにせざるを得なかった。ただ、その中には先生の書き込みがあるものが少なからずあり、先生の

読書の仕方を知るよすがとしてはやはり貴重である。また、先生が体調を崩される直前に刊行された書も見られ、先生が最後まで研究に情熱を燃やしておられたことがわかり、尊敬の念を新たにさせられた。

最後に蔵書の内容であるが、經史子集四部全てにわたって基本的書物が備わっているが（ただし、仏書・道書は少ない）、特に清人の經学書と文集の充実ぶりが際だっており、中でも後者は他で見られぬものも一二にとどまらない。これは廉孫先生が清朝考証学をとりわけ重視しておられた事を示すものであり、それはまた当時の京大シノロジーの特色でもあった。つまり、廉孫先生は京大シノロジーの方法を体しておられたということなのだが、その清代学術に対する重視と造詣の深さは幸孫先生にもそのまま継承されている。湯淺先生の学問はまさしく父子二代にわたる家学の精華であり、その蔵書はその証言なのである。明治から昭和にかけての漢学がどのようなものであったかを、これらの書物が何より雄辯に語ってくれているのである。その意味でも、蔵書の一括保存が望まれるのである。

【写真 3】

湯淺氏の講話後、会食に移った。シャンパンで乾杯後、リラックスした雰囲気の中で参加者の近況報告を交えた懇談がなされた。

【写真 4】

会食後、記念撮影を行い解散、有志は大原美術館など美観地区の散策を楽しんだ。

参加者は次の 10 名。

服部 恒雄 日本オリーブ(株)会長
(昭 22 ・西洋史)
渡辺 荘 (昭 23・哲学)
由比濱省吾 岡大名誉教授 (昭 27・地理)
三谷恵一 岡大名誉教授、I P U ・環太平洋大学 (昭 36 ・心理)
湯浅 和夫 元ユアサ商事株式会社
岡本不二明 岡大文学部 (昭 49・中文)
河合保生 ノートルダム清心女子大文学部 (昭 50・地理)
古川義人 金光教本部教庁 (昭 63・宗教)
植木 綾 岡山共立病院 (平 2・心理)
真壁靖史 放送大学 (平 15・西洋古典)
[河合保生記]

写真 1 製本なった「以文」
写真 2 湯浅氏(右)による講話
写真 3 漢籍の一部
写真 4 参加者一同(倉敷国際ホテルにて)

平成 20 年 [2008]

平成 20 年度岡山支部総会は、6 月 22 日(日)に岡山市駅前町にある「サン・ピーチ OKAYAMA」にて開催された。

11 時に由比濱省吾支部会長(岡山大学名誉教授)の挨拶で開会し、三谷恵一幹事から事業報告、古川義人幹事から会計報告、河合保生幹事から会員動向の説明がそれぞれなされ、特に質問もなく承認された。また、新たに会計監査の設置が提案され、今回講話をいただく植木綾氏が選出された。

続いて恒例の講演会に入った。今年は言語聴覚士としてご活躍の植木綾(平成 2・

心理)氏から講話をいただいた。講話の内容には用語をはじめ難解な箇所もいくつかあったものの、パソコン・VTR・プロジェクターを活用して、視覚的・聴覚的にわかりやすい解説をしていただいた。要旨は次のとおり。

◇ ◇ ◇

「失語症のリハビリテーション」

岡山協立病院リハビリテーション部主任
言語聴覚士 植木 綾(平成 2・心理)

1 はじめに

私は京大卒業後、国立身体障害者リハビリテーション学院言語聴覚専門職員養成課程にて一年間の研修を受けた。この学院は当時文学部助手であった塩坪いく子先生が紹介してくださったもので、言語聴覚療法士(Speech Therapist 以下 ST)はその後平成 10 年に国家資格となった。言語障害には、失語症、言語発達遅滞、吃音、ディスアスリア(運動障害性構音障害)・器質性構音障害、難聴などさまざまな種類があるが、勤務先は急性期から回復期医療を担う一般病院で、主として脳血管障害による成人失語症・構音障害・高次脳機能障害・摂食嚥下障害を対象としている。

2 失語症研究の歴史

心的活動に関する議論は古く、エジプトやギリシャにさかのぼるが、神経心理学の直接的な起源は十九世紀の骨相学者ガルの局在論の主張である。局在論と全体論の間では活発な論争が行われ、ブローカは発話機能が第三前頭回(図 1 のブローカ野)に局在している症例を報告した。ついでウェ

ルニッケは第一側頭回後部（図 1 のウェルニッケ野）の損傷による感覚性失語症例を発表した。更に彼はブローカ野・ウェルニッケ野の両方が損傷されるような大きな脳障害では全失語が生じ、間をつなぐ伝達路が損傷されると復唱が障害される（伝導失語）ことも理論的に導き出した。近年は神経心理学が発展し、認知神経心理学的を含む脳研究を取り入れた失語症の症状理解が活発に行われている。

【図 1】

3 機能障害(狭義の言語障害)へのアプローチ

左頭頂側頭葉、右頭頂葉後頭葉の梗塞による重度ウェルニッケ失語を呈した六十歳の右利き男性を経験した。この症例の聴覚的理解低下の原因は図 2 の聴覚分析・音韻入力辞書にあると考えられたため、音韻の弁別と難易度を操作した語彙判断を行った。このような認知神経心理学的アプローチを行った結果、単音節の聞き取りと単語の理解が改善し、次に話す、書く機能も改善しつつある。

【図 2】

4 活動制限(コミュニケーション障害)へのアプローチ

言語機能を代償する手段の描画やジェスチャーをコミュニケーションに用いたり、環境調整を行ったりする。また、1990 年後半から行われている会話分析では、患者と周囲の会話を録画や録音によって収集し、非言語表現も含めた対話者間の相互作用に注目して分析を行う。コミュニケーション

能力を評価することは容易ではなく、会話分析法などの発展がのぞまれる。

5 参加制約(社会参加など)へのアプローチ

2001 年に行われた日本失語症学会の全国調査によると失語症者の職場復帰率は 8%、家庭復帰率は 46%であり、参加制約は大きい。ST は機能改善の予測と代償手段の提案を職場や家族、介護保険サービス提供者に提案するなどして社会復帰の援助を行っている。症例への援助だけでなく、失語症状や高次脳機能障害を持った人が復帰しやすくなる地域社会への貢献も ST の課題である。

また、心理的援助を行う上で、失語症者の自己認識を把握することは重要であると思われる。川崎医療福祉大学感覚矯正学科教授の種村純先生の指導を受けて失語症者が自身をどのように認識しているか、気づく能力があるのかを研究を行った。気づきをアウェアネスというが、失語症患者本人に現在の言語障害についてモダリティごとに自己評価を求め、言語機能の一致度を調べた。結果、アウェアネスは言語機能、コミュニケーション能力、精神機能と関連していた。また発話に関する気づきが高いほど、自己修正の努力とその成功、会話中の休止（ポーズ）が会話行動で多く出現していた。今後も障害に対する本人の認識を評価する方法を検討し、心理的援助を行っていきたい。

6 おわりに

この 17 年間、岡山医療生活協同組合岡山協立病院で ST として勤務し、患者さんやご家族からたくさんのことを学ばせていた

だった。これからもよりよいリハ医療を提供して少しでも患者さんやご家族の力になれるように精進したいと思っている。

<参考文献>

鹿島晴雄・種村純（編）：『よくわかる失語症と高次脳機能障害』永井書店 2003

【写真 2】

植木氏の講話が終わるのを待ち構えていたかのように、出席者から脱兎のごとく質問が出された。ご高齢の出席者が多かったこともあり、この問題に対する関心の高さがうかがわれた。講話の中では治療の経過が実証的に示され、リハビリの成果があがる部分とそうでない部分があることが印象に残った。質問がつきないので、質問の続きは会食の中で行うことをお願いしてひとまず講話を終了とした。

続いて大坪併治氏（昭 10・国語国文）の音頭で乾杯し、会食に移った。先ほどの講話の内容を話題にした意見交換から始まり、杯・グラスをかたむけながら旧交を温める懇談が続く中、参加者の近況報告をいただいた。最後に記念撮影を行い、来年の再開を誓いつつ 14 時 30 分に閉会となった。

【写真 2】

参加者は次の 10 名。

大坪併治 島根大・岡山大名誉教授
（昭 10・国語国文）

石田 寛 広島大名誉教授、福山大客員教授・理事
（昭 17・地理）

服部恒雄 日本オリーブ(株)会長

（昭 22・西洋史）

由比濱省吾 岡大名誉教授（昭 27・地理）

大羽 蓁 岡山大名誉教授（昭 29・心理）

三谷恵一 岡大名誉教授、I P U・環太平洋大学
（昭 36・心理）

河合保生 ノートルダム清心女子大
（昭 50・地理）

平岡行雄 岡山県立岡山東商業高校
（昭 51・仏文）

古川義人 金光教本部教庁（昭 63・宗教）

植木 綾 岡山協立病院（平 2・心理）

図 1 ポストン学派の言語中枢

図 2 認知神経心理学的な単語の処理モデル

写真 1 植木氏（左）による講話

写真 2 参加者一同（サン・ピーチ OKAYAMA にて）

〔河合保生記〕

平成 21 年 [2009]

平成 21 年度岡山支部総会は、6 月 21 日（土）に岡山市平和町にある「後楽ホテル」にて開催された。

11 時に開会し、三谷恵一幹事から事業報告、古川義人幹事から会計報告、河合保生幹事から会員状況の報告があった。河合から、今年は岡山京大会総会が開催されることから、これと併せて約 130 名に案内したところ、約半数から返信があり、宛先不明は数人であったとの説明があった。

次いで以文会本部での幹事会の様子を植木幹事に代わり三谷幹事が報告した。審議事項については特に異論なく承認された。

本来なら講話後に懇親会となるところ、

總會行事に時間を要したため、懇親会の後半で行うことになった。大坪併治岡大名誉教授の発声で乾杯、懇親会に移った。途中で参加の会員から近況報告をいただいた。今回の参加者の中で最高齢の大坪先生は、今年 10 月に白寿を迎えられる。現在も学会活動・著作に勤しんでいらっしゃることに参加者一同敬服したしだいである。健康の秘訣をお尋ねすると、老人意識を持たないことと酒五勺を嗜むことであると話されたのが印象的であった。なお、今回は麻岡実知子氏が初参加された。

ひととおり近況報告が終了した後、恒例の講演会に入った。今年は支部長でもある由比濱省吾（岡山大名誉教授、昭 2・地理）氏から講話をいただいた。要旨は次のとおり。



「以文会岡山支部の歩み」

岡大名誉教授（昭 27・地理）由比濱省吾

京都大学文学部は百年の歴史を越えたが、京大以文会はその約半分の歴史がある。京大以文会会報を繰ってみると、岡山支部の活動はほぼ三期に分けられるようである。

◎1955（昭和 30）年の第一号では岡山支部の名簿では内藤雋輔氏（大 10・支那史）、内田律爾（大 4・教育）、能仁日法（昭 3・印哲）、木畑貞清（昭 4・国文）、藤井駿（昭 5・国史）、江実（昭 7・言語）の各氏で半数は岡山大学教授である。内藤氏が以文会本部の評議員、藤井氏が支部長であった。すべてもう故人になられた。これら長老の方々以外にも文学部卒業で中堅以下の方々がおられ、会員は若干増えたが、支部とし

ての行事は長老が中心の数名から十名程度の懇談会が年一回あったと記憶する。組織としては規約も会費徴収もない、狭い範囲の集まりだった。支部だよりが毎年きちんと送られた様子はないが、1972（昭和 47）年の第十五号には藤井支部長が支部だよりを寄せている。ここまでが第一期である。

大学紛争で集まりが長く中断したのち、由比濱（昭 27・地理）が藤井支部長から再建を依頼され、手を尽して教育界全般のみならず実業界も、また新規卒業生まで含む岡山県下在住者の名簿を作成し、第二期の活動に入った。名簿はその後も毎年改訂を加えた。そして「以文」第二十四号から三十五号までは幹事の由比濱が支部だよりを担当した。以下、各年に実施した行事を列举する。

【写真 1】

◎1981（昭和 56）年、新支部長に大熊立治氏（昭 5・国史）が就任。幹事を由比濱、三谷（昭 36・心理）、木下（昭 49・中哲）、横山（昭 53・英文）が勤めることになった。大熊氏は岡山京大会の新会長にも選出された。まきび会館で久々の支部会合を開き、京都から水津一朗学部長をお招きし、会長・幹事以外の出席者は内藤、湯浅（昭 20・中哲）、服部（昭 22・西洋史）をはじめ、計 21 名に達する盛会であった。これ以後、夕方の会食・懇談会だけではなく、適当な会場での講話や見学を伴う催しも企画することとし、毎年欠かさず開催した。毎年の参加者は必ずしも多くはなかったが、有意義な集まりであった。

◎1982（昭和 57）年、岡山美術館（現林原美術館）にて館長大熊立治支部長から「漢代 — 唐代の中国古陶器鑑賞」の講話。

◎1983（昭和 58）年、まきび会館にて京大から本吉良治教授（心理）をお招きし、由比濱が「ニュージーランドについて」スライドで説明。

◎1984（昭和 59）年、岡山市立オリエント美術館にて山本遺太郎館長の「シルクロードと正倉院文化」の講話。この年、石田氏（広島大学名誉教授・地理学）は昭和 58 年度岡山県文化賞を受賞。内藤氏（東洋史）は昭和 59 年度三木記念賞を受賞。

◎1985（昭和 60）年、会員による講話シリーズを行なうこととし、第一回として、まきび会館にて岡山大学・作陽短期大学・中国女子短期大学名誉教授内藤雋輔氏の「日本歴史への私の謎」の講話。三大学から名誉教授の称号を贈られているのは非常に珍しいことである。大熊支部長は昭和 60 年度三木記念賞を受賞。

◎1986（昭和 61）年、吉備津神社にて第二回講話。岡山大学藤井駿氏・奈良大学藤井学氏（昭 30M・国史）「吉備津神社の外陣・内陣・釜鳴神事・国学者藤井高直の松の屋」。社殿内部とお釜殿を見学。

◎1987（昭和 62）年、第三回講話。服部恒雄氏（昭 22・西洋史）「現代美術と牛窓国際芸術祭 — 第一回・第二回ビエンナーレ」。

◎1988（昭和 63）年、林原美術館にて第四

回講話。大熊立治支部長「平家物語絵巻展」。石田寛氏は昭和 63 年度山陽新聞学術功労賞を受賞。

◎1990（平成 2）年、林原美術館にて第五回講話。大熊支部長「続 平家物語絵巻展」。石田氏はアメリカ地理学会賞を受賞。この年までに支部創設期の中心であった内藤氏、藤井氏らが逝去。

◎1992（平成 4）年、まきび会館にて第六回講話。岡山大学狩野久氏（昭 31・国史）「平城京と飛鳥発掘の成果」。

◎1993（平成 5）年、岡山県立美術館にて学芸員福富幸氏から「鏑木清方展」の解説を受けた。この年の「以文」第三十六号からは「支部だより」を三谷恵一が担当。

◎1994（平成 6）年、第七回講話。三谷恵一氏（昭 36・心理）「日本の人文・社会科学系大学院の現状と課題—デルファイ調査」。

◎1995（平成 7）年、第八回講話。岡山大学名誉教授近藤義郎氏（昭 24・考古）「前方後円墳の成立」。この年から三谷が幹事代表になり、木下、河合の二名を幹事に加えた。

◎1996（平成 8）年、まきび会館にて第九回講話。元県立高校小川洋氏（昭 27・哲学）「表現論の試み」。

◎1997（平成 9）年、黒住教本部（神道山）にて第十回講話。黒住教教主黒住宗晴氏（昭

35・心理)「宗教心の本質」。講話後、教主公邸で会食。支部長就任以後再任を重ねてこられた大熊支部長が2月に逝去され、支部長空席のまま一年間を経過。ここまでが第二期といえる。毎回の参加者数は必ずしも多くなかったが、呼びかけによって若い会員の出席もあり、催しによっては家族の参加もあった。三谷幹事代表が幹事会で企画に苦心をしてきたが、会員による講話も以後は年配の会員のみならず若い会員にも登場してもらうこととなる。「以文」への支部だよりは河合保生の担当となった。

◎1998(平成10)年、由比濱省吾(昭27・地理)が新支部長に就任。まきび会館にて第十一回講話。(株)ナイスネットワーク石原利博氏(昭55・地理)「アンデス文化の側面—近くて遠きはフジモリ大統領、遠くて近いインカ文明—」。

◎1999(平成11)年、金光教本部にて第十二回講話。布教部長岡勝繁氏(昭38・宗教)「金光教概説」。講話後に教祖奥津城、教学研究所、金光図書館、金光教本部を見学。これまで吉備津神社、黒住教、金光教といった宗教施設を会場にし、各宗教の枢要な地位にある方々から講話を聞くことができたのは、以文会会員であるおかげである。

◎2000(平成12)年、牛窓の服部邸にて第十三回講話。服部物産合資会社代表取締役服部恒雄氏(昭22・西洋史)「地主史としての大型家屋の機能」。

◎2001(平成13)年、まきび会館にて第十四回講話。三谷恵一氏(昭和36・心理)「身

体から入るリラクゼーション—新漸進的弛緩法」。

◎2002(平成14)年、津山国際会館にて第十五回講話。京都女子大学狩野久氏(昭31・国史)の第十五回講話「美作国の成立について」。講話後、鶴山公園(津山城跡)、津山科学教育博物館を見学。

◎2003(平成15)年、ボランティア解説者祇園純子氏の講話「武蔵—武人画家と剣豪の世界観—」。

◎2004(平成16)年、第十六回講話。岡山大学・島根大学名誉教授大坪併治氏(昭10・国文)「尊敬の助動詞る・らる雑話」(文書報告)、第十七回講話金光教本部古川義人氏(昭63・宗教学)「平和を生み出すもの—宗教者への期待—」。今年度は都合により会誌上での報告となり、翌年度の会で改めて講話いただいた。

◎2005(平成17)年、銀八寿司(岡山市)にて第十八回講話。津山工業高等専門学校名誉教授川島炫三氏(昭42M・哲学)「田邊元の晩年とその後」。

◎2006(平成18)年、熊山町(現、赤磐市)英国庭園にて第十九回講話。広島大学名誉教授・福山大学教授石田寛氏(昭17・地理)「中岡慎太郎・坂本龍馬と津田弘道との会談」。講話後、熊山遺跡など町内の史跡を見学。石田氏は教育者津田について大部の著書にまとめられた。

◎2007(平成19)年、倉敷国際ホテルにて

第二十回講話。湯淺和夫氏（京大名譽教授湯淺幸孫氏の令息）「京大名譽教授湯淺幸孫及び元三高教授湯淺廉孫の明・清の蔵書について」。三谷幹事の発案により「以文」の創刊以来の支部だよりを編集・合本を計画し、完成。

◎2008（平成20）年、サンピーチ岡山にて第二十一回講話。岡山協立病院植木綾氏（平二2・心理）「高齢者の言語治療について」。

◎2009（平成21）年、後楽ホテルにて第二十二回講話。由比濱省吾支部長（昭27・地理）「以文会岡山支部の歩み」。

以上のように連年実績を積み上げてきたので、以文会本部からも岡山支部の活動を評価して頂いている。今後も企画に工夫をこらし、若い会員の参加をもっと促してゆくことが課題である。

◇ ◇ ◇

京都大学文学部100年を受けて以文会岡山支部の歴史をまとめる計画が以前から幹事会で話題となっており、支部の事業計画にもあげられていたもののあまり進展がない状況であった。早急なとりまとめが必要であろうと、支部設立当初の事情をご存じの由比濱会長に講話をお願いした次第である。報告にもあるように故人となられた方も多い今日ではあるが、会員間での情報交換の結果、生前の勤務先等が解明できたのは大きな成果であった。

最後に恒例の記念撮影を行い、15時に閉会となった。

【写真2】

参加者は次の9名。

大坪併治 島根大・岡山大名誉教授
(昭10・国語国文)

服部恒雄 日本オリーブ(株)会長
(昭22・西洋史)

由比濱省吾 岡大名譽教授 (昭27・地理)

大羽 蓁 岡山大名誉教授 (昭29・心理)

三谷恵一 岡大名譽教授、I P U・環太平洋大学
(昭36・心理)

河合保生 ノートルダム清心女子大
(昭50・地理)

鷹家秀史 玉野市立玉野備南高校教頭
(昭55・米文)

古川義人 金光教本部教庁 (昭63・宗教)
麻岡実知子 (平元・心理)

[河合保生記]

写真1 由比濱氏による講話

写真2 参加者一同（後楽ホテルにて）

平成22年 [2010]

平成22年度岡山支部総会は、7月4日（日）に岡山市北区下石井「ピュアリティまきび」にて開催された。今回は時期的なものや準備不足等もあって参加者が少なく7名のこじんまりとした会となった。

11時に開会し、三谷恵一幹事から事業報告、植木綾幹事から会計報告がなされた。三谷幹事からは本部の情勢について、法人化への動き、支部から評議員を選出するなどの点から報告と説明、ならびに従来から課題となっている「以文会岡山支部の百年（仮題）」をまとめる構想の説明や会員の動静が紹介された。また、春の叙勲で4月29日に支部長の由比濱省吾氏が瑞宝中綬

章を授与された紹介があり、拍手でお祝意を示した。植木幹事からは支部の運営にかかる予算について報告と計画説明があった。

続いて恒例の講話に移行するわけであるが、今回急な変更が生じたことについて河合幹事から説明があった。当初、由比濱省吾氏による講話「ニュージーランド先住民マオリの社会的文化的地位—マオリ復権運動—」で案内をしていたが、事情により中止せざるを得なくなり、今回は用意していた要旨と資料の配付にとどめ、次回に講話いただくことになった。そこで急遽河合幹事から「スマトラ島を訪ねて」の題目でスライドを使用しての話題提供がなされた。



「スマトラ島を訪ねて」

河合保生 (昭 50・地理)

低地の港湾都市パダンとスマトラ断層に沿った標高約千メートルの高原の対比、赤道通過地点で土産品を販売する商魂たくましい女性達、アルプス＝ヒマラヤ造山帯ゆえの火山・カルデラ・温泉湧出・地熱発電用熱水井戸の掘削、焼畑の様子、舟形を模した家屋、イスラム社会の中にあるキリスト教地域などなかなか訪れることが困難な地域だけに、様々な質問に答えながらのプレゼンテーションとなった。

民家の庭に花木が植えられ色とりどりの花が咲いていること、林立する衛星放送アンテナの様子、店先で販売されている多様なイモ類と熱帯果物、稲刈りと田植が同時進行している二・三期作の景観、香辛料の効いた現地料理、イスラム国家のなかのキリスト教徒地区の生活様式などに関心が集

まった。

【写真 1】スマトラ島の景観を解説する河合幹事

12 時を少し回ったところで、服部恒雄（昭 22 年・西洋史）氏の乾杯発声で会食・歓談となった。この間、参加者一人一人から近況報告をいただいた。その中で、平成 19 年に講話いただいた湯浅和夫氏（京大名誉教授湯浅幸孫氏の令息）から「湯浅幸孫及び元三高教授湯浅廉孫の明・清の蔵書」のその後の動静が報告された。以文会にとっても貴重な情報と考え、会の後、湯浅氏からいただいた一文を次に転載する。



「湯浅廉孫・幸孫の明・清の蔵書」

のその後の経過について

湯浅和夫

一昨年は祖父廉孫・父幸孫の明・清の蔵書についてお話させていただきましたので、此の度はその後の経過について簡単ですが御報告させていただきます。

京都大学池田秀三教授・宇佐美文理准教授の六年にわたる調査・整理も平成 21 年に漸く終え、受け入れ先の岡山大学附属図書館に調査・整理を終えた物から順次搬入を開始しこの五月迄に貴重本の大半を納めることが出来ました。

現在、岡山大学附属図書館ではカード取り、燻蒸等の作業を進めており、年内には特別書庫に収まり「湯浅文庫」として近々公開されることと思います。

大学附属図書館を取り囲む厳しい環境の中、完全なる一括保存は書庫能力の問題で

実現出来ませんでしたが、貴重本の大半は散逸することなく「文庫」として一括保存され、貴重本を含む残りの蔵書も京都大学他で研究に役立てられることになりました。

御尽力賜りました京都大学池田秀三教授及び宇佐美文理准教授をはじめ、受け入れ先の岡山大学関係者の方々に心より御礼を申し上げます。

平成 22 年 7 月 8 日



最後に記念撮影を行い、次回講話者の依頼と出席が増えるような日程をとることを確認し、次回での再開を約して閉会となった。

【写真 2】参加者一同（ピュアリティ まきびにて）

参加者は次の 7 名。

服部恒雄 日本オリーブ(株)会長
(昭 22・西洋史)
三谷恵一 岡大名誉教授、I P U・環太平洋大
(昭 36・心理)
湯浅和夫 元ユアサ商事(株)
多屋頼典 元岡大教授 (昭 42・心理)
河合保生 ノートルダム清心女子大]
(昭 50・地理)
鷹家秀史 玉野市立玉野備南高校教頭
(昭 55・米文)
植木 綾 岡山協立病院 (平 2・心理)
[河合保生記]

平成 23 年 [2011]

平成 23 年(2011)年 3 月 24 日に開催された京都大学・以文会評議員会に岡山支部三谷恵一評議員（京大自動車部）は、これまで 60 年以上の岡山支部の活動を次の三期にまとめて報告した。

- 1 岡山支部創生期の活動
- 2 支部活動の中断と再建—第二期の活動
- 3 第三期の活動と課題

以上のように実績を積み上げてきたので、以文会本部からも岡山支部の活動を評価して頂いている。今後も企画に工夫をこらし、若い会員の参加をもっと促してゆくことが課題である。現在の岡山支部の役員は次の五名である。

・支部長 由比濱省吾（昭 27・地理）・幹事代表 三谷恵一（昭 36・心理）・幹事総務 河合保生（昭 50・地理）・幹事会計 古川義人（昭 63・宗教）・幹事監査 植木綾（平成 2・心理）。更に

・岡山京大会長に黒住宗晴氏（昭 35・心理）が就任している。平成 23 年 2 月 18 日(金)にお住まいである神道山本部にて「神道山鍋とお酒の会 岡山京大会懇親会」が開催され、11 月のホームカミングデイで強調されている京都大学同窓会本部との連携を協議した。

・アメリカンフットボール京大対関大戦を岡山マスカットスタジアムに招致するというセリオカップ第 25 回瀬戸大橋ドリームボール岡山記念大会（5 月 22 日）、京大総長地方講演の受け入れなどをマイクで協議した。参加者約 25 名であった。京大対関大戦は、津尾桂典（工学部 S 43）らが世話し、岡山協立病院内科医長（工・60・アメフト）、植木幹事（同病院言語聴覚士）

ら多数が声援を送り、黒住会長（京大ハンドボール）は 150 人を神道山で接待した。
・備前焼の改革に取り組む陶芸家の金重慄（昭 44・農）が山陽新聞賞を受賞され、六月に 120 名でお祝いした。

四角なるビール泡立つ備前焼 恵一
祝杯のビールの泡は四角なる 恵一

・愛媛県出身で、姫路市北部の福崎町の近畿福祉大学大羽 泰元学長（昭 29, 31M, 34D・心理）が、平成 23 年 1 月 23 日間質性肺炎のため逝去された。従四位端宝中叙賞授与。

日本キリスト教団岡山教会で葬儀が行われた。享年 80。夏目漱石が先生をしていたこともあるが爆撃で焦土と化した母校松山中学に、1945 年 10 月蹴球〔サッカー〕部を復活。S 35 国際基督教大学助手・38 岡大法文講師・44 教授・55 文学部教授・平成 3 川崎福祉大学教授・副学長・12 近畿福祉大学学部長・15 同学長・姫路学院理事・20 退職。平成 6 年山陽新聞賞（学術功労賞）受賞。和子未亡人から兵庫県福崎町の学長室左右の窓から眺めた「緑の谷間からの伝言」(Some messages from the green valley) が寄せられました。そこには

「皆さんはこれから、その働き場を求めて努力しなければならないのですが、社会情勢は大変きびしく、容易なことではないと思います。忍耐して勉学を重ね、人柄に磨きをかけて下さい。道はいかに暗く険しくとも、失敗を恐れず希望をもって、雄々しく進んで下さい。皆さんの健闘を心から祈っています。」

などが認められています。

・本年度は河合保生幹事が超多忙のため、総会は年末に行い、第 23 回講話として昨年端宝中綬章授与をされた日本 N Z 学会副会長由比濱省吾支部長から次の講話をいただくこととしている。

「ニュージーランド先住民マオリの社会的文化的地位—マオリ復権運動—」

・『以文会岡山支部 100 年の歴史』を 5、6 年先に出版することとし後輩の賛同もある。今のうちに纏めておこうという。現在の累積準備金は 180,000 円である。幹事団とボランティアに USB メモリーを配布して文書蓄積を実行している。

〔三谷恵一記〕

平成 24 年 [2012]

平成 24 年(2012)度岡山支部総会は、4 月 1 日（日）に岡山市北区下石井「ピュアリティまきび」にて開催された。今回の参加者は湯浅 和夫、服部 恒雄(昭 22・西洋史)、中野 光行(昭 26・独文)、三谷 恵一(昭 36・心理)、河合 保生(昭 50・地理)、山本 和良(昭 52・独語)、鷹家 秀史(昭 55・米文)、古川 義人(昭 63・宗教)、植木 綾(平 2・心理)の九名であった。



当初参加を予定していた多屋 頼典氏(昭 4

8・心理)は体調不良で欠席された。湯淺氏の父君が以文会会員であることから、規約第三条三に準拠して評議員会に会員として推薦することとした。

15時に開会。最初に古川幹事より昭和23年度岡山支部の会計報告が行われ、監査報告を植木幹事が行った。その後、鷹家秀史幹事より「コーパス言語学入門 ― コーパスから分かることと分からないこと ―」というテーマで講話が行われた。講話では、コーパス言語学の経験論的な背景やコーパス研究の限界とネイティブの直観の関係、コーパス研究の可能性、及び楽器の the の出現に関わるコーパス研究の例が紹介された。

三谷幹事から去る3月27日に行われた京都大学文学部以文会評議員会と卒業式の様子が報告された。岡山支部では『以文会岡山支部の百六年(仮題)』の出版を計画していること、現在までの原稿の集まり状況他を報告、昭和30年以来の『以文会』誌への『岡山支部報告の復刻版』がHP「以文会岡山支部」にアップされ、岡山支部総会では参加者一同に配布されるなど鷹家幹事の尽力により急速に進展していることである。報告終了後、中野光行氏の音頭で乾杯・会食が行われ、参加者の近況報告がなされた。なお、岡山支部からの「以文」の紙面に関する五つの改革案は、評議会で継続審議となった。

- 1 横書き2段組に改める。
- 2 日英バイリンガル化に配慮し講義に使用できるようにする。
- 3 広告をとる。
- 4 56年間のバックナンバーを製本する。
- 5 56年間の「以文」を電子化・PDF化

する。



「ニュージーランド先住民マオリの社会的文化的地位―マオリ復権運動―(その1)」

由比濱 省吾

(岡山大学名誉教授、昭和27年地理)

平成22年度に予定されていた講話の原稿(一)は以下の通りである。

＊

マオリの運動の根源的背景には、一八四〇年二月六日に北島北部のワイタンギで、イギリス政府代表のニュージーランド代理総督ホブソン海軍大佐とマオリ首長たちとのあいだに締結されたワイタンギ条約がある。それまでヨーロッパ人が植民地を増やしていった時代には、白人が一方的に先住民を追い払って土地を奪って入植したのが通常だった。そこでは先住民は差別された。アメリカの西部劇でインディアンたちが白人を襲撃する場面が多く、まるで彼らが悪者のように描かれているが、被害者であり誇り高いインディアンからすれば、土地を奪った侵略者に対して抵抗するのは当然のことである。

これに対して、ニュージーランドでは先住民首長たちと対等の立場で平和に条約を結んで植民地としたのだった。これはまことに異例であり、後々までアメリカ、南アフリカ、オーストラリアで見られたような厳然とした人種差別政策がまったく取られなかった基本精神だと言える。マオリは統一国家を形成したことがなく、日本の戦国時代のように各部族が割拠していたので、イギリス代表側は各部族の首長たちを交渉相手とした。彼らを北島北部のワイタンギに集めて条約への署名を求めたのである。

ワイタンギ条約の内容は前文と後文を除けば僅か三カ条の短いものである。以下に英文からの訳を示しておこう。

第一条 ニュージーランド部族組織同盟の首長ならびに同盟員にあらざる個別独立の

首長は、完全にかついかなる留保条件もなく、上記同盟あるいは個別の首長が、各々その領土に行使しあるいは所有し、ないしは行使あるいは所有すると考えられる権利及び権力を、すべて唯一の主権としてのイギリス女王陛下に譲渡する。

第二条 イギリス女王陛下はニュージーランドの首長と部族及び各個人に対し、土地、財産、森林、漁業及びその他の財産の完全・排他的にして不可侵の所有権を、従来同様に保持しておきたいと望み欲する限り、集団的あるいは個別的に所有することが可能なことを、確約し、保証する。ただし、部族同盟の首長及び個別の首長は、女王陛下からその問題処理について任命された官吏との間において合意に達した価格でそれらの土地を譲渡したいと欲するときは、陛下に排他的に先買権を譲渡するものとする。

第三条 イギリス女王陛下は以上を考慮して、ニュージーランドの原住民に対して、陛下の保護を与え、またイギリス臣民が持つすべての権利と特権を与えるものとする。

この英文は、既に布教のために移住していたウイリアムズ牧師によって、マオリとの締結交渉前夜に急遽マオリ語に翻訳された。しかしマオリ文では、第一条のマオリが譲渡する主権はカワナタンガと訳されているが、これはマオリ語ではなく、マオリ語にそれに相当する言葉がないため英語のガヴァナーシップをマオリ読みした新語に過ぎず、マオリにとっては意味不明の言葉だったし、失うものはさほど重要なものではないと考えたのである。第二条ではマオリの土地や資産についてのマオリ首長の所有権についてはランガティラタンガという語が用いられているが、これは首長であること、首長がマナをもって治めること、伝統的な首長の権限を意味する。したがって、保証された所有権は伝統的な首長の所有権だと彼らは考えた。しかし英文の正文と、一夜漬けで訳したマオリ文（マオリにとってはこれが正文となる）との微妙な相違が、のちほど深刻な紛糾の種となるのである。マオリ文の三条文の訳を示しておこう。

第一 同盟の首長と、その同盟に参加していないすべての首長は、自分たちの島におけるすべてのカワナタンガ（主権）を、完全に、永久に、イギリス女王に譲渡する。

第二 イギリス女王は、土地、村、および財宝のランガティラタンガ（首長たる絶対的な権限の行使）により、ニュージーランドの首長、諸部族ならびにすべての人民を保護することに同意する。しかし、一方、同盟の首長およびすべての首長は、土地を所有している者と買おうとしている者とが合意した価格で女王に土地を売ることになっている。（土地を買おうとする者は、女王の財務官として、女王により任命されている）

第三 以上のように、この合意された女王の統治の計画のために、女王はニュージーランドの一般民衆を守り、そして、イギリス国民として市民の権利と義務を同等に与えるものである。

ウイリアムズの居館前の会場に集ったマオリ首長たちは賛否の議論をしたが、四五人が署名し（文字を持たないから各々の入れ墨の模様を書いた）、以後、ホブソンの使者が各地を廻って五一五人の署名を集め、北島はイギリス植民地となった。マオリがごく少数しか住んでいなかった南島はホブソンの併合宣言でニュージーランド植民地に含められた。

しかしマオリと白人入植者との紛糾はまもなく頻発した。その主な原因は条約にある女王の土地先買権を無視したウエークフィールドの移民会社（ニュージーランド会社）の不適切な、むしろ不正な土地取得にあった。マオリから取得したと称する土地の合計面積はニュージーランド全国よりも広いというずさんな計算状態だった。また入植者の増加に伴ってマオリ側にも土地売却への抵抗運動が起きた。

一八四四年に北部の首長がコロラレカ（ラッセル）の国旗掲揚の旗竿を切り倒して反抗の意志を表わし、一八四五年にコロラレカに放火したので二年に及ぶ北部戦争があったが、マオリ対白人の紛争が本格化

したのは、ワイカト地方のマオリがイギリスのヴィクトリア女王に対抗したマオリ王擁立運動である。一八四五年タラナキ地方では土地売却に反対する首長と賛成する首長に分かれ、政府と賛成派が測量を開始すると妨害を受けた。そこで、一八六〇年に総督は政府軍を投入し、これが長期にわたる戦争の発端となった。この戦争は、かつてはマオリ戦争、現在では土地戦争と呼ばれている。

一八五八年に初代マオリ王テ・フェロフェロが即位した。銃で武装したマオリは善戦したがタラナキで制圧され、一八六三年には戦争はワイカト地方、オークランド地方に、さらに一八六四年にはベイ・オブ・プレンティ地方に拡大した。ワイカト地方南部を含む北島中西部一帯がキング・カンツリーと呼ばれているのは、二代マオリ王タフィアオがこの地に引き籠もり、マオリのゲリラ兵が潜み、白人権力の及ばない地域としたからで、その中心地はオトロハンガだった。

一八八一年にマオリ王が和平交渉を受入れたので、二十年に及んだ土地戦争は収束した。一八八四年にマオリ王はイギリスで白人の土地取引の不正を訴えたが、効果はなかった。一八八五年にはキング・カンツリーが開放され、白人による土地測量が開始された。マオリ土地没収を定めた入植地法（一八六三年）が一八六四年に発効し、敗れたマオリの土地の広い面積が没収された。この不満が以後百年もくすぶり続けたのである。マオリの歴史では、敗れた側は勝利者の思うままにされたのが常識だったにも関わらずである。決定的な相違は、勝ったのがマオリのどちらかでなくて後から入ってきた異人種の白人だったことである。

戦争終結に先立つこと一六年、一八六五年に先住民土地裁判所（のちにマオリ土地裁判所と改称）が設置された。一八六七年にはマオリ男性に普通選挙権が与えられ、議会にはマオリ特別枠として四議席が置かれた。一八八〇年代に、戦争で敗れ土地を没収されて意気消沈していたマオリを再興しようと志す指導者が現れ、一八九二年に

マオリ議会コタヒタンガの第一回会議が開かれ、運動の成果として一九〇〇年にマオリ土地管理法、マオリ評議会法が制定された。一九一〇年にはマオリ青年党が結成された。優れた素質のマオリは政界・法曹界・学界・宗教界などで活動したが、一般的に言えばマオリの学歴は低く、都市に移動してもブルーカラーの職業にしか就けないのが通常であり、学校でのマオリ語使用は禁止され英語を強制された。そして彼らの伝統的社会・文化・宗教は圧倒的多数を占める白人の社会に飲み込まれていき、マオリ語を完全に話せるマオリすら激減した。一九四五年にマオリ社会経済開発法が成立した。しかしマオリの経済的文化的地位は低いままに留まっていた。一九六三年のマオリ・コミュニティ振興法によりマオリ評議会が成立した。

鬱積していた彼らの不満は一九七一年の祝日ワイタンギ・デーにおける、若者たちが結成したマオリの抵抗組織ナ・タマトアのワイタンギ祝賀行事への抵抗となって現れた。一九七五年には女性活動家フィナ・クーパー女史の指導のもとで大勢が参加した、北島北部からウエリントンの国会議事堂までのマオリ土地行進が全国的注目を浴びた。過激な運動も頻発していた頃であるが、非暴力のこの行進の影響は大きかった。

ワイタンギ条約法によるワイタンギ審判所（Waitangi Tribunal）が一九七七年に設立され、一九七五年以降のマオリに対する不正に関して審議することになったが、審判所は一九八五年に調査対象をワイタンギ条約締結の一八四〇年にまで遡ることに決定した。これは実は大変なことで、不適切であるかもしれないが日本で例えれば、もしもアイヌ人口がもっと多数で力があり、旧幕時代から明治政府の時期にかけて土地を失い、和人が開拓して多彩・近代的な経済活動を展開してきた土地について返還あるいは補償を迫ったとすれば、それに似た要求になる。はたしてワイタンギ審判所に提出された要求は山積し、いつまでかかれば処理可能かもわからない状態となった。そして補償要求額も国庫を脅かしかねない巨額になった。

マオリ幼児教育を目的としたコハンガ・レオ（言葉の巢）の最初の施設が一九八二年に設立され、以後各地に出現した。一九八七年にはマオリ言語法が制定され、マオリ語が英語と同格の公用語となり、ニュージーランドと並んでアオテアロアも正式国名となった。代表的名山はマオリ名に復し、マウント・クックはアオラキ山、エグモント山はクラナキ山になった。官庁・大学など公的機関の名称は英語とマオリ語の両方で表示されるようになった。テレビでもマオリ語放送の番組が組まれた。

マオリは、ワイタンギ条約で陸上はともかく海域まで譲渡したのではないと主張した。マオリ自身の水産資源に関する活動は漁撈の域を出るものではなかったが、ネルソンを本拠とする最大の水産会社シーロード社に多額の分配金を要求した。一九八九年にはマオリ漁業法が成立し、一九九七年に政府とマオリの間でシーロード社の割当て配分が合意された。マオリの限りない要求に苦慮した国民党政権は、一九九四年に、ワイタンギ審判所の裁定は財源内で処理すべきことを提案し、十億ドルを上限と発表した。一九九七年にはワイタンギ審判所による南島ナイトフ族の請求の和解が成立した。二〇〇四年、海浜・海底の所有権を求めてマオリ土地行進が行なわれ、海浜・海底法が制定されて翌年発効した。

マオリ語教育の復権までは学校でのマオリ語使用が禁止されていたとはいえ、白人とマオリが、都市の住宅地で隣どうしに住んでも、車内やテーブルで同席になっても、学校で同じクラスになっても、誰も不快だなどと思ってこなかった国柄である。そういう差別感は全くなかった。白人とマオリの結婚も珍しくなかった。イギリスで活動している世界的オペラ歌手キリ・テ・カナワは混血で、デームの称号を持っている。アメリカや南アフリカで見られた厳然たる黒人差別、オーストラリアでの白豪主義とは全然ちがっていた。

マオリ語が英語と並んで公用語となり、しかもワイタンギ審判所の判事はマオリが優勢を占めるので、通常マオリ語が用いられる。したがってマオリ語を解さない人に

としては争う場合に不利は否めない。

マオリの主張に同情・共感を抱く人々（日本人の研究者を含む）はマオリの主張に共鳴し支持したが、一方、上に述べたようなマオリの数々の要求と活動に対して疑問と不満をもつニュージーランド人である白人も多かったが、彼らは表だってそれを言うのを躊躇していた。その中であえて公然と意見を述べたのがダニーディンの事業家でオランダ名誉副領事も勤めたスチュアート・スコットだった。私は第三人として、裁判で例えれば、論旨の評価は別として、原告の主張だけに耳を傾けるのではなく被告の言い分も聞くのが公平かつ正当な態度だと考え、マオリの要求・行動を紹介した論説すでは多いから、彼の著書『*Travesty of Waitangi*, 1995（ワイタンギ条約の毀損）』とその続編『*Travesty after Travesty* 1996（毀損に次ぐ毀損）』を訳して一冊にまとめ『ニュージーランドの苦悩』（1993年、私家版）を作った。ニュージーランド研究者でこのようなことをしたのは私だけである。スコットは、マオリの運動に現れた公園・建物の占拠や公共の建物への放火、法のもとでの不平等（法で禁止した行為に対するマオリ優遇の判決）等々について非を鳴らしている。スコットの著書に記された主張の当否は読者が判断すればよい。私は次項で述べるようにマオリの神話や伝説について訳書を出しており、マオリとの接触もあるから、マオリと白人の双方に対して全く公平で、どちらか一方だけにしか肩入れしない態度は取らない。

私の見解は、マオリは公民として差別され不利な立場に置かれていたのではない。その点是有色人を公民としては厳然と差別していた国々と全く違う。このことは、まず基本的に理解しておかねばならない。もしマオリが差別され続けてきたのだと主張する人があるならば、それは疑問である。問題は、ニュージーランドが植民地化された初期に、ワイタンギ条約の精神に違背して不正に土地を取得した白人の行為、入植白人を保護する立場から、異義を唱え抵抗したマオリを排除する立場をとって、反抗したマオリを制圧して彼らの財産を没収し

た植民地政府の行為に対する非難である。植民地政府はこういったマオリに対しても公民権は平等に認めていた。差別・抑圧していたのではない。

私は、水産会社がマオリの漁業活動に損害を与えたわけではないのに、海に対する権利の主張を楯に、各社のうち最大手のシーロード社だけから巨額の配分を得るのは全くの不労所得ではないかという疑念を抱くのである。獲得が決定してから、少数である南島のマオリがその大部分を得ることについて、圧倒的多数の北島マオリが分け前を増やそうと争ったのを醜いことだとも思う。しかしそれはマオリ間の問題である。

マオリの要求にはもっと白人を驚かせた件がある。クック山を含むマウント・クック国立公園のマオリへの返還だった。スコットはこれをとんでもない要求だと受取ったが、彼の本にはこの結末は書かれていない。結末を見る以前の時点に出版されたからである。たしかに政府はアオラキ山をマオリに返還したが、マオリは日を置かずそれを国に寄贈したのである。これは建前を貫徹した上での大人の態度だった。

マオリについては、政治的、法律的、経済的側面だけではなく、社会的文化的側面についてもよく理解しておかねばならない。いまニュージーランドは西ヨーロッパ文化とマオリ文化の両立する国として成熟しようと努力している。マオリ文化尊重の現われの一端は、学会などの公式挨拶ではまずマオリ語で述べ、次に同じ内容を同じ人が英語で述べるということに見られる。とはいえ、白人はいくつかのマオリ単語を知っていてそれを日常に使うことがあっても、マオリ語を流暢にあやつれる人は少ない。多くの人にとってはマオリ語の講演はチンプンカンプンである。学校でマオリ語教育をすることについて、この国際化時代に、他国では全然通用しないマオリ語を教えるのにエネルギーを用いるよりも、英語自体をもっとしっかり教えるべきで、マオリ研究をしたい人、マオリ文化を大切にしたい人がマオリ語を学べばよいのだと言う人もある。しかしまた、国民の割以上を占めるマオリとの文化的共存を発展させる

にはマオリ語教育は大事だという考えもある。

ニュージーランドの国章は中央上に王冠を、その下には楯を描き、両側には左に国旗を持った白人女性、右側には伝統的な外套を肩から羽織り、タイアハ（槍）を持ったマオリ戦士の姿を配している。（図1）つまり兩人種の共存融和を象徴しているのである。イギリス植民地の歴史を有する国として、このような国章を持つのは珍しい。これまでもマオリ文化は蔑視されていたのではなく、イギリス文化の優越する中でマオリの歴史的所産は愛好されてきた。しかし上に見たように、マオリの精神的深層に潜んでいた不満が激しく表面化した事実を見ると、異質の文化がよく融和した二文化社会を完成していくことは実に大変な仕事なのである。

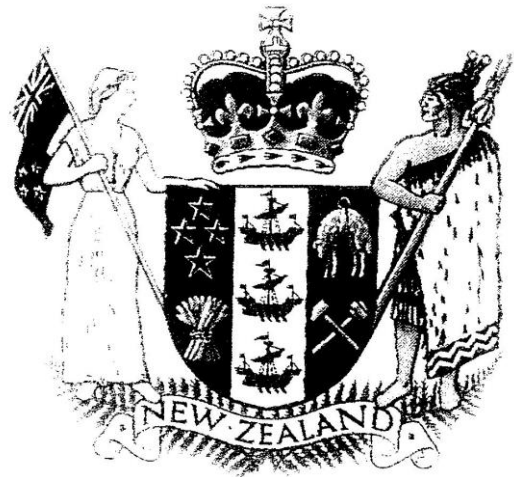


図1 ニュージーランド国章

平成 25 [2013]

平成 25 年(2013)度岡山支部総会は、4 月 7 日（日）に総社市の「サンロード吉備路」にて開催された。今回の参加者は湯浅和夫、服部恒雄（昭 22・西洋史）、中野光行（昭 26・独文）、三谷恵一（昭 36・心理・評議員）、河合保生（昭 50・地理・総務通信）、山本和良（昭 52・独語）、鷹家秀史（昭 5

5・米文・総務HP)、古川義人(昭63・宗教・会計)、渡邊莊(昭和23・哲学)、同夫人、多屋頼典(昭48・心理)、同夫人、鷺見勝由(昭55・宗教)、岩田成人(昭60・宗教)の14名であった。

最初に本年1月31日に享年87歳で逝去された、故 由比濱省吾会長追悼のことは三谷と河合が述べ、黙祷を捧げた。「故人は、日本ニュージーランド学会副会長としてマオリ族の研究に生涯を捧げ、人の和を保って以文会岡山支部の維持・発展に配慮し、日本の大学院博士課程改革のデルファイ調査1990を三谷とタイアップして新潟大学・金沢大学・岡山大学有志教官で全国有識者816名を2度調査して600頁の報告書を文部省に提出し、平成22年端室中綬章を授与された。」



(由比濱省吾先生)

次に、湯浅和夫氏の父君が以文会会員であったことから、規約第三条三に準拠して評議員会に湯浅和夫を本会の会員に推薦すること、同じく三谷氏は奈良市の翠月庵へ47年ぶりに帰省したが、しばらくの間引き続き岡山支部会員とした。また、平成28(2016)年を目標に、『Japan とは何であり何であるべきか—京都大学以文会岡山支部1

00年の歴史から示唆されるもの—』を出版することが再度説明され了承された。

総会の後、三谷氏より「日本の三つの敗戦と認知行動療法の想起」の題で講話がなされた(要旨は別記)。その後、昼食会に移り近況紹介を通じて旧交を温めた。せっかくの機会であるので鷹家幹事の案内により、雪舟で知られる総社市内の井山寶福寺に向かった。あいにく桜の季節は終わっていたが、春らしい趣の午後を過ごすことができた。



(参加者一同 寶福寺にて)



「日本の三つの敗戦と 認知行動療法の想起」

評議員、岡山大学名誉教授・IPU環太平洋大学名誉教授

三谷恵一(昭36・心理)

一、人の力を超えた究極の環境療法の開発
・一七野における方向分析カラムの発見・幾何学性・地球の自転と公転による生命の非対称の出現・左脳と右脳と両側性刺激作用・帰納と演繹の二刀流・望まれる住宅設計とデザイン

二、二種類のリラクセーション
・いったん緊張することによるリラクセーションの獲

得・ゆっくりしたリラクセーション（二分間）・急速リラクセーション（三〇〇ミリ秒）・「目」「口」「右足・脚」による方法
三、日本の三つの敗戦 ①第一・以上の行動療法は一九二九年アメリカの実験心理学者ジェコブソンにより開発されていたが、日本の精神医学、心理学は無知であった。一九四三年ガダルカナル、インパール双方で米英印の認知行動療法に全滅し、一九四五年広島・長崎に原爆が投下された。②第二・一九九〇年ごろからカウンセラーいから増やしてもいじめ・自殺は急激に増大し、二〇〇一年度は宮城県・福島県・仙台市を除いても五五、一五二件と史上最悪を記録した。③第三・二〇一一年三月一日の東日本大震災と福島原発事故は、第一、二、三の加重現象(summation)であり、責任は明治以来の文理双方にある。希望の灯は、なでしこ Japan のパフォーマンス顕現したものの根底にある（詳細は三谷恵一著『新しい認知行動療法と環境療法：脳・神経・筋肉・骨ネットワークのリラクセーション』2012 おうふう）。

平成 26 [2014]

平成 26 年(2014)度岡山支部総会は、6 月 2 日（日）に岡山市の「ミヨシ野駅前店」にて開催された。今回の参加者は湯浅和夫、三谷恵一（昭 3 6・心理・評議員）、河合保生（昭 5 0・地理）、山本和良（昭 5 2・独語）、鷹家秀史（昭 5 5・米文）、石原利博（昭和 5 5・地理）、古川義人（昭 6 3・宗教・会計）、岩田成人（昭 6 0・宗教）植木綾（平成 2・心理）の 9 名であった。

最初に、植木綾さんから一昨年に行った福島県での被災者救援の活動について報告をしていただいた。次に、古川義人さんから会計報告が行われたのち、平成 2 8 年を目標に岡山支部の活動をまとめた『Japan とは何であり何であるべきか—京都大学以文会岡山支部 100 年の歴史から示唆されるもの』を出版することが議論された。



◇ ◇ ◇

「原発 23 キロ地点のリハビリテーション支援報告」

岡山協立病院リハビリテーション部

言語聴覚士 植木 綾（平成 2・心理）

私は 日本言語聴覚士協会を通じての専門職派遣要請にこたえて 2012 年 5 月 1 日から 7 月 31 日まで福島県南相馬市立病院にて支援活動を行った。

岡山協立病院では医療機関の社会的責務を重視しており大震災後に避難・移住してこられた方を対象に現在も被災者検診を行っている。私も現職の身分でありながら三ヶ月間の出向を快く許可していただいた。

1. 震災当時からの病院概要：赴任先の病院は福島第一原発からほぼ真北 23 キロ地点にあった。津波を免れたものの「警戒区域」、つづいて「避難準備区域」に指定された。十日間で全入院患者を自宅や県外に送

り出しスタッフは自主避難、退職、避難所巡回をした。警戒区域の見直しによって数ヶ月かけて徐々に病院機能を取りもどしてきたという。現在は診療圏唯一の脳外手術を行う病院であり、体内に取り込まれた放射性物質の測定なども行っている。人口約7万人のうち2万人が市外に避難を続け仮設住宅に五千人余が生活している。

2. 支援の日々：支援初日に見学した小高地区（四月に昼間だけ立ち入り許可された地区）の惨状は忘れられない。泥をかぶり倒壊した家屋、津波のあと海水の引かない水田、ガードレールに乗り上げられた自家用車。道路脇の瓦礫や自動車に白い布を結んだ竹竿、それはご遺体が発見された場所であった。余震は少なかったが毎日のローカルニュースで天気予報とともに市町村の空間線量が伝えられるのはショックであった。臨床業務は急性期脳血管障害を主な対象としており、他県からの応援スタッフと働けたことがとても刺激的であった。ほかに放射能の学習会、地域懇談会、仮設住宅の運動指導の見学と補助、他府県からのボランティアによる傾聴活動などに参加して、三ヶ月はあっという間に過ぎた。大規模災害を「被災混乱期」、「応急修復期」、「復旧期」、「復興期」の4フェーズに分けると私の任期は復興期にあたり、地域医療再生支援（臨床業務と新人S Tの育成）、仮設および自宅生活支援（仮設住宅の運動指導の補助、健康講話補助）を行った。また復興期には支援からの円滑な撤退が求められるが、七月末に福島出身のS T (speech therapist) 2名に臨床業務を引き継ぐことができた。その七月末には千騎もの馬が駆ける伝統行事「野馬追」が復活し見学する



ことができた。地域全体のQOLが高まったと感じられた祭りであった。

3. 地域の現状：福島県の山野の除染は数十年かかるといわれ、保障や生活再建のめどは立っていない。市の人口約7万人のうち、2万人が市外に避難をつづけ、仮設住宅に5千人余が暮らす。4歳以下人口は3千人から3分の1以下に減少、高齢化率は32.2%（震災前25.9%）で医療介護の担い手が不足している。ハード面でも老健施設が倒壊し市立療養型病院は旧警戒区域で閉鎖となっている。過疎で医療崩壊していた（だからこそ原発を誘致していたともいえる）上に震災・原発事故が追い打ちをかけた形だ。地元のスタッフからは原発の影響の少ない地域に比べて取り残されると不安の声を聞いた。自宅が帰宅困難地域に指定されているスタッフもいた。その中で脱原発の声に背を向けて派遣期間中に福島県大飯原発が再稼働されたことにエネルギー政策の矛盾を強く感じた。

4. おわりに：2013年12月に岡山県言語聴覚士会の代表として災害リハコーディネータ研修に参加した。そこで支援の目的、心理面への対応、フェーズごとの現場と後方コーディネーターの役割を学び、自身の果たした支援の位置づけを再確認した。南相馬は原発事故により、復旧～復興期と災害の進行が同時に起こっていた。そのため

多面的・長期的な地域再生プログラムが必要であり、その一つとして現地職員の心のケアもある。今回発表させていただいたように被災地のそとで、震災を風化させず災害対応の教訓を得てその結果をフィードバックすることは 現地職員の心のケアにも有効と思われる。

また、現時点で岡山県の防災計画のなかでリハチームの位置づけは明確ではない。災害弱者が安心して生活できる岡山をつくるために「予防期」のいま、各組織で教育研修・備蓄準備・ネットワークづくりが重要と考える。それは高齢者が増え続ける岡山での平時の地域づくりにつながり、言語聴覚士の社会的責務の一つであると考えます。

平成 27 [2015]

平成二七年(2015)度岡山支部総会は、六月七日(日)に岡山市の「ミヨシ野駅前店」にて開催された。今回の参加者は大坪併治(昭 10・国文)、湯浅和夫、三谷恵一(昭 36・心理・評議員)、岩田 成人(昭和 60・中文)、河合保生(昭 50・地理)、山本和良(昭 52・独語)、鷹家秀史(昭 55・米文)、古川義人(昭 63・宗教・会計)、屋敷利紀(平元・国史)、植木綾(平成 2・心理)の十名であった。

最初に、三谷氏から開会の挨拶、続いて活動報告が行われ、主に平成 28 年を目標に岡山支部の活動をまとめた『Japan とは何であり何であるべきか—京都大学以文会岡山支部 110 年の歴史から示唆されるもの』の出版に関わる報告がなされた。続いて古川氏より会計報告がなされ、その後、各自近況を報告した。今回は

104 歳の大坪併治先生が久しぶりに参加され、そのお元気な様子が出席者を驚かせた。休憩後、日本銀行岡山支店長の屋敷利紀氏(平成元・国史)より、氏が京都大学アメリカンフットボール部主将として甲子園ボウル、ライスボウルに勝利し日本一に輝いた足跡を語っていただいた。

*

講話「京大だから日本一～京大アメリカンフットボール部の魅力～」

日本銀行岡山支店長 屋敷利紀氏

岡山支店長就任記者会見では「なぜ日本銀行に就職したのか」と執拗に問われ、閉口しました。文学部卒の総合職は過去 50 年を遡っても私だけ。京大文学部を志望したのは、不遜にも歴史学を極めたいとの思いからでした。しかし、幸か不幸か京大でアメリカンフットボールに邂逅し、入学当時に思い描いていた人生とは全く異なる道を歩んでいます。

私の人生を変えたアメリカンフットボール。「なぜ青白い京大生が激しいスポーツで日本一になれたのか」との質問を、これまで数え切れないほど受けてきました。意外に思われるかも知れませんが、私は「京大だからこそ日本一になれた」と確信しています。

アメリカンフットボールは万能選手が不要で、体力・技術不足は戦略・戦術である程度カバーできます。京大は日本有数の男子学生数を擁する国立大学なので人材が確保しやすく、しかもキャンパスが集中し、進学振分けもないので、練習環境にも恵まれていました。インターネットのなかった当時、多数の海外在住OBを擁するという京大ならではのメリットを活かし、NFL

やカレッジフットのビデオを大量に送ってもらい、最先端の戦術を他学に先駆けて導入しました。今では当たり前になっていますが、対戦相手の一挙一動を多数のビデオカメラを駆使して録画し、徹底的に分析しました。

そして何より体力・技術、戦略・戦術の前提となるのは「必ず日本一になる」という強靱な精神力です。「4回生時に日本一を達成する」、それが我々の「事業」でした。京大では、一番日本一になりたいと思っているのは4回生です。だから4回生が雑用を一手に引き受け、3回生以下には練習に集中してもらう。新入生は神様です。監督、コーチを如何に本気にさせるかも重要です。監督・コーチには来年があります。しかし4回生に来年はありません。もとより健康に悪い酒・タバコは厳禁です。大学の体育会出身と聞くと「良く飲んだでしょう」と言われますが、社会人になるまで酒は受け付けませんでした。

同じ肉体的能力を持つ選手であっても、機械のように動く選手と自分で考え柔軟に行動できる選手であれば後者の方が圧倒的に優位です。京大では、一人一人の選手が、「何が最適か」を考えてプレーしていました。「日本一」という「事業」を達成するため、4回生が強靱な意志でチームをリードし、選手が自ら考えて各々の役割を果たす。当時の京大は、日本一を達成するための人材とシステムを兼ね備えていました。

私が主将を務めた昭和62年度の学生日本一を決める甲子園球場には約4万人、日本一を決める国立競技場には約5万人の観衆が詰めかけましたが、その9割以上が京大の応援でした。当時の指導教官だった朝

尾教授や西島総長をはじめ、大学全体が我々を支えて下さいました。日本一の達成は、学問もスポーツも許容する京大だから成し得たことと感謝しています。

しかし、指導を頂いた水野前監督からは一度も褒めてもらったことはありませんでした。ところが、先日、前監督ご夫妻と会食したところ、前監督から次の話を伺いました。「50年のコーチング生活で、お前が主将を務めた年のチームが京大アメリカンフットボールの『最高型』だった。日本一になるという意識も桁違いに強かった。だが、褒めたら『お前はその程度の人間』と言っているに等しい。だから現役時代は絶対に褒めなかった」。(文責 鷹家)

平成 28 [2016]

岡山支部総会は昨年十一月二十日に岡山支部総会を「ピュアリティまきび」で開催した。当日参加した学友は 眞壁靖史(H15 西洋古典学) 植木 綾(H2 心理学) 古川義人(S63 宗教学) 岩田成人(S60 宗教学) 明石幸子(S57 英語英文学) 鷹家秀史(S55 米文学) 山本和良(S52 独語独文) 河合保生(S50 人文地理学)、三谷恵一(S36 心理学) 湯浅和夫の十名であった。

三谷支部長の開会のあいさつの後に、岡山支部で取り組んでいる『Japan とは何であり何であるべきか—以文会岡山支部活動 107 年が示唆するもの』出版にむけての経過報告が行われた。続いて、各出席者から近況報告が行われたあと、昭和55年米文学専攻の鷹家秀史氏より「英語教育の課題」というテーマで講話が行われた。質疑の後、会食を行い教育や学問のあり方について様々な意見が取り交わされた。その

後、古川義人（S63 宗教学）より会計報告が行われた。

＊

「英語教育の課題」

岡山高等学校 校長 鷹家秀史

日本の英語教育を考える場合、「昭和 57 年の革命」とでも呼ぶべき大きな変化を無視するわけにはいかない。当時の文部省初中局英語調査官であった小笠原林樹氏は「戦後の学習指導要領のどこにも「英文法」という科目は登場していないのだから、教科書種目に「英文法」の検定教科書もないほうが 指導要領との整合性があり、…困ることは少しもないと私は判断した」と述べ、それまでふつうに使用されていた英文法教科書は姿を消すことになったのである。この年以降日本の英語教師は「英語について解説する人」から「英語を用いた言語活動のコーディネーター」の役割を期待されることになる。私見によれば、以後日本の英語教育は劣化を繰り返すことになる。文法の指導や英文和訳、和文英訳は英語教育の諸悪の根源となり、学校現場では週一回のみの英文法の時間がこっそり行われ、『即戦ゼミ』『Next Stage』などの安直な暗記文法・構文教材が大手を振って闊歩し、英語教師は自信とビジョンを喪失し、残ったのは暗記科目としての文法観のみということになった。

現在の英語教員は、自らの受験英語の知識を繰り返せば事足りりとしている者が大半である。私は高校の英語文法の授業を以下のような観点から再生させることを夢見ている。一つは、文法における論理と推理をベースに授業が行えているかどうかという観点、もう一つは高校生の知的レベルを

満足させる授業になっているかどうか、最後に、言語使用を優先する表現英文法になっているかどうかという三点である。

ここでは表現英文法とはどのような指導項目になるか一例を示す。未来を表す英語の表現には、will を用いる形式、be going to, 現在進行形を用いる形式、現在形を用いる形式、未来進行形を用いる形式などがあ

	会話	小説	雑誌	新聞	論文
may I ask...?	245	322	17	13	3
can I ask...?	596	237	30	9	4
	1990-1994	1995-1999	2000-2004	2005-2009	2010-2015
may I ask...?	170	130	100	105	95
can I ask...?	143	147	133	170	283

るが、表現英文法の観点から見ると、その文法形式の差を念頭にどの場面でどの形式が主に用いられるかを説明しなければならない。様々な形式を使用場面と関連づけて説明しないかぎり表現に直結した文法指導とは言えないからである。

では、高校生の知的レベルに合わせながら実際の使用場面を説明する知見をどのようにして手に入れたらよいのだろう。私は、文献的な学習や欧米の辞書に基づく規範的文法の学習よりも、英語使用の実態に基づく帰納的な分析から得るものが多いのではないかと考えている。幸いにも、ネット上には数多くのコーパスを使用できるサイトが少なくない。最も使用が簡単で大規模なコーパスのひとつに BYU corpus (<http://corpus.byu.edu/>) がある。同大学のマーク・デイビス教授が構築したコーパスを使えば驚くべき事実が判明する。例えば、「許可」を求める一般的な英語表現である May I ...? と Can I ...? の歴史的かつ使用分野別の比較が一瞬にして可能となる。

コンピュータを使用した言語学的な比較から得られる知見は無限である。言語直感を持たない外国人研究者にはこれまで不可能であった分析が可能になりつつある。今後この分野での研究が日本の高校における文法指導の可能性を大きく広げる可能性があることを指摘しておきたい。

(文責 鷹家)